連句

猫蓑作品集V

序

平成六年は、猫蓑にとってあまり幸せな年ではなかった。先ず四月に羅浮亭正江宗匠が倒れられ、その後入院加療されてA・C・C、その他における指導が全く出来なかったこと、十月には会およびA・C・Cの中心的存在であった行々子庵杉亭宗匠が急逝され、さらにその後一ケ月もたたぬうちに今度は会の重鎮であり、連句協会理事もつとめておられた福井隆秀氏をうしなうことになり、私も一時は茫然となったが、この難関に私をささえて切りぬけ、こうして作品集も見事に出版できるようになったのは、ひとえに桃径庵和子宗匠を中心に、理事の中川哲氏、杉内徒司氏、下鉢清子氏、その他会員諸氏の協力に依るもので、厚く感謝する次第である。

今年は所収、歌仙三十一巻、源心十三巻、二十韻二十一巻、半歌仙八巻、短歌行一巻の計七十四巻で、昨年出

版のⅣにくらべ約三分の二に制限縮少した。これは作品を精選した為であり、質的には向上していると思う。

本年度はA・C・Cその他で永く受講された方が七名も立机されることになり、猫蓑同人会にも新しく異色なメンバーが加わることになった。そのように会の血を新しく、なるべく異った人と一座できる機を多く作ることが、よい作品の生まれる第一の条件であろう。

この作品集Ⅴを鏡として、自他の作品をよく読み、よく味わって、今後の飛躍に資して欲しいと思う。

平成七年一月二十四日

東　明　雅

目次

序　東　明雅

歌仙

早稲刈る　東　明雅　捌　8
青棗　青木秀樹　捌　10
さまざまの花　秋元正江　捌　12
初夏の　市野沢弘子　捌　14
萩の道　岩井啓子　捌　16
小春凪　内田麻子　捌　18
濃龍膽　加藤道子　捌　20
菖蒲田の　金久保淑子　捌　22
冬構　蒲原志げ子　捌　24
薫風の　倉本路子　捌　26
春の旅　上月淳子　捌　28
烈日や　文音　隆秀・孝子　30
八十八夜　佐古英子　捌　32
岩鷚　両吟　良彌・千町　34
みせばやを　式田和子　捌　36
秋江や　膝送り　志げ子・好敏・達子　38
雪渓を　副島久美子　捌　40
白萩や　瀧川雅代　捌　42
黄落に　豊田好敏　捌　44
牡丹の香　両吟　孝子・哲　46
聖灰祭　中田あかり　捌　48
春浅し　橋野代々子　捌　50
冬ざくら　八角澄子　捌　52
遠筑波　原田千町　捌　54
山茶花や　東　郁子　捌　56
アクロポリス　両吟　千町・隆秀　58
秩父路　独吟　健悟　60
阿波踊り　本屋良子　捌　62
白もくれん　矢崎藍　捌　64

風の道……山崎一恵 捌 66
古き蟇……若尾よしえ 捌 68
源心（二十八韻）
花翳し……両吟 多迦夫・明雅 72
八千草……梅田利子 捌 74
神迎……大窪瑞枝 捌 76
孟秋や……桑原美津 捌 78
ビスクドール……文音 貞子・孝子 80
青鷺……須田智恵 捌 82
かぎろひて……下坂元子 捌 84
紅葉かつ散る……下鉢清子 捌 86
野紺菊……雑賀 遊 捌 88
春日和……杉山壽子 捌 90
秋薔薇……中島啓世 捌 92
オリオン……文音 健悟・冬乃 94
紅葉狩……峯田政志 捌 96
二十韻
落葉道……両吟 明雅・正江 100
秋雲に……浅賀淑代 捌 102
雪しぐれ……猪子春治 捌 104
行く秋や……岩垂景翠 捌 106
夏めくや……久保田庸子 捌 108
滴りの……近藤守男 捌 110
初夏や……権頭和弥 捌 112
秋濕……佐藤良彌 捌 114
邯鄲や……真田光子 捌 116
小鳥くる……島村暁巳 捌 118
秋寒の……鈴木 茂 捌 120
冬菫……武村利子 捌 122
風光る……田村満子 捌 124
もみづるを……椿 紀子 捌 126
黒きマリア……登坂かりん 捌 128
原爆忌……長崎和代 捌 130
糸柳……細川研三 捌 132
窓に涼しき……本田八重子 捌 134
ダービーや……松田多恵子 捌 136

竹落葉……村田冨美捌 138
真夜のアネモネ……文音 嫋・文子・蓉子・紀子・弘子・千恵子・淑代 140
半歌仙
秋の社……膝送り シズ・よしえ・キヨ子 144
曼珠沙華……稲葉道子捌 146
土用照……加藤治子捌 148
秋時雨……五味蓉子捌 150
蝉しぐれ……佐々木有子捌 152
八入にも……橘文子捌 154
斉州島……塚本泰子捌 156
三世代……町田順風捌 158
短歌行
背骨一本……膝送り 和弥・正秋・博之・淑代・文子 162
あとがき……下鉢清子 164

◊

歌　仙

◊

早稲刈る

東　明雅　捌

ささやかに刈り干す早稲や路地住ひ　坂本孝子
単車の集ふ月を待つ橋　染谷佳之子
ギター曲ソロ演奏の音の澄みて　岩井啓子
舌にしゃきしゃきマコロンの味　浅賀淑代
座蒲団に丸く眠れる座敷犬　東明雅
時を忘れて毛糸あむ人　松野栄利子
雪ゆたか今年のイブを楽しみに　曽我部雅辺
ユーロトンネル抜け逢ひに行く　代之
亭主とは違ふ寝息が胸の中　孝
太鼓が告げる夏場所の月　同
鰻屋の煙で冷やを二三杯　啓
リストラいつも下の方だけ　辺
名門のバレーチームも解散に　孝
雨漏りしるき大寺の壁　利
みちのくの遠野の里は夢に似て　代
蜂追ふ家族忙しきころ　之
ダンボール敷き母国語の花の宴　孝
手紙を付けて放つ風船

びん底の眼鏡が曇るめかり時　代
法律顧問に渡る裏金　孝
魔術師の上衣ポケット鳩が棲み　啓
三角屋根を蓋ふ冬蔦　孝
平家読む声朗々と寒の凪　同
惚れっぽいとて評判の後家　辺
がまがへる今度の彼にそっくりよ　啓
隣気になるけふの席替へ　孝
秋狂言前売り切符売り切れて　辺
辻にしたたる鶏頭の赤　利
縦走の表丹沢月も出で　孝
殺気纏ひてよぎる虚無僧　代
はがくれの術をみがきて五十年　孝
家苞にする雑魚のつくだ煮　之
石段の上と下とでじゃんけんぽん　啓
バーバーポストまはる横丁　代
この森の魑魅魍魎も花吹雪　雅
俳諧くるひ膏盲の春　辺

平成六年十月二日　首尾
於　江東芭蕉記念館

青棗

青木　秀樹　捌

門脇にぐっと太るや青棗　豊田好敏
客をもてなす月のあかあか　佐古英子
夜長人棋譜と碁盤を持ち出して　松本碧
嬰児の声が破る静けさ　鈴木茂
ギャラリーはガラス工芸名作展　妹尾幸子
蒸鮓うまし酒は吟醸　青木秀樹
雪しまく下京の宿友を待つ　敏
遮断機の前止まる自転車　茂
ミニスカート見たい見えない見えにくい　敏
舌っ足らずでねだる抱擁　英
親犬のしっぽにぢゃれる子犬達　幸
自民さきがけ社会連立　茂
干上がりしダムを悲しみ夏の月　碧
怪談芝居主役まっぴら　敏
墓石の朱色の文字も鮮かに　幸
単身赴任羽のばす人　茂
舞ふ花に日がな一日酔ひ痴れる　幸
若駒を追ふモンゴルの丘　英

ご開帳善男善女列なして　碧
　薬膳料理処方様々　敏
天然の塩でもみ出す皮下脂肪　樹
　惜しみ惜しまれ消ゆるジュリアナ　敏
人形のやうに愛され捨てられる　茂
　若手芸者も還暦を過ぎ　英
小雨降るお百度石を眺めゐて　碧
　フィリピンの鶏「オカーサン」と鳴く　幸
ダイバーの宝庫に沈む駆逐艦　敏
　大漁旗を部屋の飾りに　碧
同窓会話もはづみ月天心　碧
　甘蔗までヤオハンは売る　茂
書を閉ぢて行く末思ふそぞろ寒　碧
　明治は遠く今は平成　英
ボーカルの引立て役はジャズピアノ　茂
　ラジオ体操春の夢覚め　敏
山陰にただひっそりと花大樹　碧
　蝶風に乗り空を漂ふ　樹

平成六年八月二十七日　首尾
於　中村橋佐古庵　幸

明雅先生中寿の賀

さまざまの花

秋元　正江　捌

旅硯さまざまの花書きとめて　秋元正江
二間廊下に現るる猫の仔　黍穂
かぎ針で春のショールを揺り椅子に　千恵子
ハットトリックあげる歓声　博之
高速の車渋滞月満ちぬ　みづゑ
しその実入りのむすび好評　美恵
運動会少女ら脛を惜しみなく　ゑ
キスにも落ちぬ口紅を買ふ　美
ショーソンの甘き詩曲にゆだねをり　之
細巻煙草くゆる灰皿　ゑ
通商の円卓会議刻止めて　之
パンナコッタは「なんのこった」と　千
河童忌の胡瓜をもげば月かをる　同
欄間に探す部屋の冷房　穂
一億の一般家庭皆中流　千
華僑の身すぎ三把刀より　穂
銀輪を連ねてゆかんリラの道　美
憩ふベンチに聴ける囀　ゑ

風船（ナオ）の印字不思議に歪まざる　穂
　への字への字の親と子の眉　美
よくわかるいびき頼りのD病棟　同
　夜這ひ違ひが馴れ初めとなり　千
チャタレイに思ひとどかぬ森の人　之
　蔓にすがりて冬苺ゆれ　美
酌み交はす山形の酒「雪むかえ」　千
　テープに入れる婆の呪ひ　ゑ
子子を説明出来ず画も描けず　美
　浸す手水にどこか神さび　千
月明り懐中時計の蓋重く　穂
　日展入選夢にみた夢　美
とろろ汁（ナウ）あちらこちらがむずがゆし　同
　もぐらたたきのもぐらもこもこ　千
この辺にリサイクルゴミ捨てなさい　穂
　旧町名でものを尋ねる　ゑ
花万朶細川匂の香の深く　江
　地平はるかにたちし陽炎　ゑ

平成六年三月十三日　首尾
於　江東芭蕉記念館

初夏の

市野沢弘子　捌

初夏の風のまぶしき岬かな　市野沢　弘子
新樹馳せゆく駒の嘶き　内田　麻子
衣桁には単袴のかかりゐて　式田　和子
手びねり鉢に盛りし打菓子　雑賀　遊
似たやうなドア尋ねつつ月の径　山口　みづゑ
酔歩の人の提げる舞茸　杉江　杉亭
高点の短冊もらふ川柳忌　和麻
猫の自慢にかづけくどかれ　遊
回しては婚約指輪隠すなり　ゑ
古墳を探るファイバースコープ　和
エジプトに幼児抱きしボランティア　遊
薬に用ふ丸仏手柑　亭
月白く凍鶴の背照らさるる　麻
生なりの色をいつもまとひて　ゑ
予備校の現国講義朗々と　麻
タイプ流行らず叩くワープロ　和
ベイエリア花の若木の根つきたり　遊
目借時とて忘る弁当

二死満塁ふうせん飛ばす応援団　麻
ああだかうだと過す内閣　ゑ
職に賭け金は後からついてくる　亭
勇みへ惚れて女房店出し　和
抜き衿にちらりと残るキスの痕　麻
地獄極楽共にみた仲　遊
世田谷の襤褸市で売る三八銃　和
ボタンを押してホットドリンク　弘
大物を釣りあげし魚籠傍らに　ゑ
山の真上にかかる半月　ゑ
だんまりは呆けをかくす秋扇　麻
ちちはは恋し夢のうそ寒　ゑ
ケンケンパ広い横丁すでになく　和
ブレーキちょっときかぬ自転車　遊
五十路なる息子を誘ひうまき酒　同
手妻習ひてとばす蝶々　亭
落人の里の小さき花の庭　ゑ
ぜんまい時計のどらかに鳴る　弘

平成六年六月二日　首尾　亭
於　梶が谷房連庵

萩の道

岩井　啓子　捌

傘も身もつぼめて通る萩の道　式田和子
うはさしきりに月を待つ客　岩井啓子
美術展彫像の向き決まるらん　佛淵健悟
四桁四桁のホーンナンバー　倉本路子
肩先にナップサックを引っかけて　橘文子
鋳物の町に夏燕飛ぶ　路悟
到来の葛饅頭のよく冷えし　路和
そんな目をして見ちゃいけません　路和
うっすらと衿足染める愛のあと　文路
女子高生の午後は危なく　文和
中華街関帝廟にお賽銭　和
撥投げ上げる芸の相伝　同路
寒声を張り居ずまひを正しけり　路同
狐かさこそ油揚げをひき　和路
ローカル線次の電車は消えたやら　文路
五十回忌の遺骨還らず　路同
風立ちて月へ舞ひ舞ふ花吹雪　同悟
細き鉛筆握る春興　悟

うらうらとつむりの青き健児達（ナオ）　同
寅さんぶらり西へ東へ　文
象潟の海に芭蕉の香が残り　悟
錫のちろりに入れる地の酒　和
友だちが間男となるひょんなとき　同
粋な別れに向かぬ純情　啓
スチュワーデス新規採用冷えわたる　和
老の独り居咳の止まらず　路
ごきげんに横丁落語おうかがひ　文
袖をはらへば鬼と変はりし　路
皓々と満月渡るコロシアム　悟
夜長ひそかに数ふ贋札　路
複写機の裏に飼ひたりちちろ虫（ナウ）　文
子らの描く絵にたくらみのなき　悟
三所帯中の世代が気をつかひ　文
机上の旅の夢のふくらむ　和
花の山修道院の鐘遠く　啓
干鱈を煮込む琺瑯の鍋　悟

平成六年八月二十二日　首尾
於　新宿・角筈文化センター

小春凪

内田　麻子　捌

小春凪鳥の巣ひとつあらはなり　内田麻子
大根干せる背戸に昼月　雑賀　遊
ペーチカにトランプ遊びはづみ居て　山口みづゑ
教則本を開く先生　式田和子

待望の新車やうやく到着し　杉江杉亭
箱の皮剥丸き口する　中島啓世
音（ウ）たてて麦酒なみなみ注ぎ合ひぬ　市野沢弘子
訛に覚え衝立の陰　和ゑ

よか嫁女日向おかめの恋模様　和遊
ニューハーフとは誰も知らざり　和
売出さる形状記憶綿のシャツ　世
水澄む川にゆるる吊橋　亭世
山刀月にきらりと払ふ杣　和
御遷宮なり一世一代　ゑ
殿様も政治改革正念場　弘
頭痛胃痛は人に話さず　世
しみじみと笠に花降る雲井坂　亭
風船の糸枝にかかれる

寄(ナオ)っちゃ駄目ペンキ塗り立て子猫ちゃん　遊亭

三K仕事出稼ぎに行く　亭和

うなされし夢は正夢株上下　和世

番狂はせの若い大関　世遊

熱いキスアイスクリーム溶けるまで　遊弘

肩よりずれるキャミソルの紐　弘ゑ

残されし中折帽に指の跡　ゑ麻

自立の出来ぬ男掃く程　麻ゑ

漱石の全集又も売出され　ゑ弘

時の鐘つく野火止の寺　弘和

満月の夜半藍瓶の蓋ずらし　和遊

茸つまみに赤い葡萄酒　遊亭

そぞろ寒(ナウ)ロイヤルオペラ幕下りぬ　亭弘

とぼけた味の老優も逝く　弘亭

郵便受あっと驚く大きさに　亭世

遊動円木並ぶのどらか　世遊

ある程の花揃へたる桜山　遊麻

S字を描いて飛んでゆく蜂　麻遊

平成五年十二月二日　首尾

於　梶が谷房連庵

濃龍膽

加藤　道子　捌

躑躅楚々と迎ふる濃龍膽　加藤　道子
物の音澄みて閑もれる席　橘　文子
自転車は月に追はれて走るらん　小原　正子
帽子のつばはいつも後に　本田　八重子
D・P・E只今留守の札掛り　文
でんでん虫を籠に飼ふ児等　八
富士詣六根清浄唱へつつ　文
卒寿なりてもきりり引く紅　道
こぶ付のフィリッピーナの嫁に来て　正
新郎も立つ厨広々　文
機関銃一挺二挺で揉めに揉め　正
タレント教授出番待ちなり　文
千秋さん逆さに眺む寒の月　同
下駄を鳴らして空風の中　道
テリトリー嗅ぎつつ帰る犬の鼻　八
ミニコミ雑誌百部刷り上ぐ　文
姉妹都市花の使節に選ばれて　八
海峡遥か望む初虹　文

姿なき囀りのみを背戸に聴く　正
　ＴＶ画面に現れし心霊　同
遊行寺に未だ眠れぬ照手姫　道
　旧き街道尋ねゆく旅　同
値下りの電子辞典を買ひ込んで　文
　蟹　蝦蛄　蝤蛑　鮑　鰭　鰯　八
髭親父頑固一徹縮シャツ　文
　誠意尽くしてのちの駆け落ち　正
姓なんかどうでもいいのあなたなら　文
　クンパルシータ・カルバドス乾す　道
満月にショーウィンドウ浮び出づ　八
　蔓梅もどき信楽の壺　同
そぞろ寒悠々として過す予後　同
　頼みもせぬに増えし悪友　正
局前に記念切手の長き列　文
　クレープを焼く香り漂ふ　同
昏れなづむ盆地の村は花吹雪　道
　畑打ち終へて戻る畦道　八

平成六年九月十六日　首尾
於　鎌倉おうめ様

菖蒲田の

金久保淑子　捌

菖蒲田の八ッ橋人のあふれけり　金久保　淑子
水鳥の巣に吹き渡る風　副島　久美子
黒ビール陶のジョッキに注ぐらん　岩井　啓子
小銭足りぬとちょっと慌てる　内田　麻子
終電車通過月守る山の駅　篠原　達子
ギター囲みて夜学子の群　東　明雅
外米にサフランつかふシェフの腕　麻雅
苦みばしった顔に惚れ惚れ　久
女好き遺伝法則そのままに　雅
船場道修町今はビル街　麻
クマネズミマルチメディアにはびこりて　達
受けし名刺に探偵の文字　啓
月笑ふ炉辺に自画像描き進む　同
納金毘羅妻は欠さず　麻
のぼせあげP・T・Aで脱毛症　達
白鳥還るみちのくの空　雅
瀧桜夢のごとくに花しだれ　同
気の合ふ友とかぎろひの中　久

ぶらんこを心ゆくまで漕ぎ上げて　同
ティタイムにはナタデココなり　麻
行革で予算審議はそっちのけ　久
四万六千日も終りぬ　雅
口ずさむリリーマルレーン映画館　啓
ストリッパーも時に純情　達
呼吸法相棒がはや産んだ気に　久
九尺二間に残る虫鳴く　雅
西鶴忌岩波文庫復刻版　麻
宝の市で升を買ふ月　雅
網代打わんさわんさと魚がとれ　久
インベーターのまぎれこむ路地　啓
ゲートボール律気に生きて子の遠く　達
同窓会で南仏の旅　同
草原に角笛の音流れゆき　啓
服に合せる春のスカーフ　麻
花ふぶく枝に結びし小短冊　淑
しっぽの丸い仔猫じゃれくる　啓

平成六年六月八日　首尾
於　俳句文学館

冬構

冬構リスの尾いよよ太りけり　蒲原志げ子
紅葉散り敷く谷戸の細道　式田和子
床の間の壺の幕釉先づ褒めて　加藤道子
新しき機種入れたパソコン　本田八重子
塾二つ掛け持ち教師仰ぐ月　橘文子
爽籟の候連句三昧　高橋信子
おくんち（ウ）の神輿あざやか辻廻り　橋野代々子
唐人冠ちょっと面皰が　和文
ラブハントここが穴場とベイエリア　道文
氷川丸にもベッドあります　文代
強請られて銀行口座底をつき　代重
麝香の薫り輸入制限　重和
月光に白蛾の舞ひの狂ほしく　和代
カルピスソーダー薄くして飲む　代文
ヴイオレンス映画梯子の癖ありて　文代
行列好きも流行の内　代久
花爛漫造幣局の通り抜け　久末
苞は幼に紙の風船　末久子

蒲原志げ子　捌

家(ナオ)ぬちに初刷り積まる弥生尽　道
鍋吹きこぼれ捜す雑巾　信
大仏にペンキをかけし罰あたり　重
戦乱に笑む武器の商人　文
火の用心車用心掏り用心　和
うるめ焼くにもやをら蘊蓄　文
とりに来た物の名忘れくやし媼　信
山滴れば人の恋しき　久
公達にすがる腕のかぼそくて　げ
くわんくわんの唇をつきだす　和
月射して海原金の針を敷く　信
大江光の曲に秋澄む　久
彫(ナウ)刻を触らせ見せる美術展　道
学生横綱部屋にスカウト　代
故郷に錦を飾る夢幾度　重
和蘭芥子水に流るる　同
花に酒何の不思議のあるものか　げ
照鷺の来て呼び込みし吉　道

平成六年十一月十八日　首尾
於　鎌倉おんめ様

薫風の

倉本　路子　捌

今宮　水壺
佛淵　健悟
岩井　啓子
橘　　文子
倉本　路子　悟

薫風の吹きぬけてゆく山家かな　壺
　通りのバスの揺らす木苺　悟
ダイバーはウェア揃へて集ふらん　文
　すこし疲れて憩ふ長椅子　同
絵手紙に月と兎を描きあげて　同
　温めし酒うまきこの頃　啓
おくんち（ウ）の席がとれたと留守電に　悟
　カラオケ塾に母を尋ねる　啓
さよならをすらりと言へて恋重ね　悟
　新進の騎手粋な男装　壺
蚤の市値切って買ひし革鞄　文
　からくり人形かっと目を開け　壺
月寒くナイル下りの帆掛船　啓
　咳ばらひして市長来訪　悟
ここと決め掘れど温泉まだ噴かず　啓
　お伽噺はきつう残酷　悟
花の座の針の筵にかしこまり　文
　髭にまつはる虻の一匹　壺
　　啓

長城（ナオ）の戦に倦みしよなぼこり　悟壺

摩訶不思議なり夢のお告げは
駄菓子屋のたたきに拾ふ五円玉　悟壺

金魚掬ひの技を競へる
解夏の僧スクランブルの辻に立つ　啓悟文

ビルの利権のもめて半年
証文を楯につめよる陰のひと　悟壺

をとこごろしと噂かしまし
選挙区の区割り容易に定まらず　啓路

お国訛を聞きに行く駅
廃坑にゆらりと昇る赤き月　啓文

伊万里の鉢に盛りし秋茄子
あな冷（ナウ）ゆと万歩の一歩踏み出だし　啓文

老いし右近の書きし寄席文字
ファミコンを転校生に借りてくる　壺文

鳴かぬ雀に声かけてをり
咲き満ちし花の上なる天守閣　悟壺

除幕式にもたてるかぎろひ　路悟

平成六年五月十六日　首尾
於　桧原村　兜家

春の旅

上月　淳子　捌

川幾つ渡りて出羽や春の旅　上月淳子
潮の香かすか角ぐめる荻　八角澄子
炉の名残持ち寄りの菓子さまざまに　瀧川雅代
猫好き同士話はづめり　副島久美子
月昇るいっさんぱらりこ児が散って　篠原達子
路地を吹き抜く風の新涼　下坂元子
湿（ウ）りたる橡の実二つ拾ひ来し　神谷安子
パリの女が語るその過去　澄安
さりげなく解きたる帯をたたみ居り　元
青き簾の奥の暗闇　達
豊葦原瑞穂の国の輸入米　代
やうやく慣れし左ハンドル　久
着ぶくれて昔ダンディーなりし父　代
梟鳴きてかかる弦月　元
王宮を買ってはみたが持て余し　代
咥へ煙草の烟むらさき　元
カンバスに溢れんばかり花の色　代
蜜を集めに蜂の飛び行く　久

菩提寺の縁に坐れば山笑ふ　元
　食事すんでもまだまだと婆　達
井戸に釣り冷やして売れる甜瓜　澄
　店ひやかすも旅の楽しみ　久
筒井筒逢ひしその夜口づけす　安
　まさかまさかで孕むなどとは　達
抽斗にしまひ忘れし宝籤　澄
　子の写真機をちょっと借り出し　代
フィクションもノンフィクションも自在にて　久
　ダリはお髭で宇宙交信　達
夜半覚めて月に起き出す天狗茸　澄
　新藁打って草鞋作れる　元
秋の蝶穴太積越え見失ふ　安
　チンチン電車廃止間近き　澄
朝毎のラジオ体操元気よく　久
　生活信条箇条書して※　代
散りゆける無告の民に花万朶　淳
　千代紙人形ならびうららか　達

※千鳥ケ淵墓苑

平成六年三月三十日　首尾

於　西葛西図書館

烈日や　文音

福井隆秀
坂本孝子

烈日や特攻の友まなかひに　秀
カンナ炎え初む分離帯上　子
「亭主留守訪問無用」声もなし　秀
床屋が喋る町の情報　子
筋目みな決りて月の稽古能　秀
かりがね高く渡る島影　子
絶版の詩集手に入り青蜜柑　秀
独占欲がやきもちとなり　子
大奥の中臈が守る閨の闇　秀
猫ぴちゃぴちゃと水を呑むらし　子
見栄のため買ひしパソコン塵だらけ　秀
シャンゼリゼーから出した絵葉書　子
森厳と聖誕祭のひとの列　秀
魔法使ひの橇は三日月　子
監督に注文つけるプロデューサー　秀
純粋理性で腹はぺこぺこ　子
山翳の廃校に花無心なる　秀
石のあはひをのぼる若鮎　子

病臥中の隆秀氏より八月十五日付お葉書「詩心は衰えていないが体はボロボロ」とあり、「烈日や……」の句が添えられていた。九月十三日付「子規なんかエライもんですね。痛みに号泣しながら俳句短歌の革新をしたんだから」。十月二十六日付「今の痛みをこらえて八十枚回顧録を書き

襲名にゆかりを招く春の茶事　同

すったもんだでごねる親戚　秀子

洗濯のからっと乾くこともなく　秀子

賄賂の度胸持てず窓際　秀子

黄昏はいつも待たれてゐるやうな　秀子

スキャンダルにて磨かれし美女　秀子

泊まれない男の後に来る男　秀子

たましひのごとよぎる蛍火　秀子

貴船から鞍馬へ越えし若き頃　秀子

病がちなる師を庇ひつつ　秀子

癇癪の盃が飛び砕く月　秀子

文化勲章辞退する秋　秀子

香しき菊人形の袖袂　秀子

亡びしものは美しきかな　秀子

ゴスペルを唄ひて知らず我がルーツ　秀子

遍路続ける海沿ひの道　秀子

幹に触れ花に頷き桜守　秀子

ポプラの絮の止めどなき宙　秀子

平成六年八月十五日　起首

平成六年十一月二十七日　満尾

来年いっぱい連句協会報に載せますから読んで下さい。私の遺書です」。そして十一月「十七日急変、入院となった」。二十一日電話で「前句を教えてよ」二十五日花前の句三つ拝受。二十七日訃報に接した。この一巻を満尾し心よりご冥福をお祈り致します。

八十八夜

佐古　英子　捌

煮物あり風の八十八夜かな　吉田憲助
茶摘を終へて蒸(ふか)す饅頭　佐古英子
春園に晴れ着の友の集ふらん　松本碧
磨き上げたる螺旋階段　生田目常義
大屋根のうへにぽっかり望の月　青木秀樹
帰る子供ら栗の毬(いが)蹴り　豊田好敏
名産(ウ)の新蕎麦すする旅がらす　鈴木茂
背中合はせに湯煙の中　助義
ハーディング君はほんとにつめたいね　碧
多感繊細微熱美少女　子
装丁も詩情豊かな南仏記　樹
木菟の宿いまは閑散　敏
月斜め窓から覗く雪坊主　茂
井戸端会議がむしゃらが勝ち　助
大漁の幟はためく港町　義
くさり解けば駆けめぐる犬　碧
あちこちの花火尋ねる花火好き　子
小盆に載せて運ぶ蜜豆

練馬（ナオ）には美術館あり涅槃の図　樹
まだ威張ってるむかし軍人　敏
いづくにか雲散霧消わが夢よ　茂
減税だけが楽しみとなり　助
体温を感じ合ひつつちゃんちゃんこ　義
ダビデの王のよこしまな愛　碧
苛酷なるサファリ・ラリーを無事に終へ　子
魚の形の箸置きを買ふ　樹
三太夫祖父の代から居付きたる　敏
訛言葉で祝ふ豊作　茂
月待てば最終列車笛鳴らし　助
濁り酒酌み酔興の唄　義
糖（ナウ）尿にぎっくり腰に惚けも来て　碧
医者に育てた息子早逝　茂
マンションに建て替へてもう十年に　樹
光る千川巣離れの鮒　助
堤高く空いちめんの花盛り　子
秘蔵の軸を掛ける春愁　敏

平成六年五月五日　首尾
於　練馬中村橋佐古邸

岩鶏（いはひばり）

佐藤良彌

手で拭ふ額の汗や岩鶏
　覆ひ尽くせる四方の新緑
織り上がる絹のジャガード鮮やかに
　きのふ覚えてふっとでる歌
通勤路立ち止まり見る望の月
　ばったこはがる稚な児の居て
黒部ダム山粧ひて放水す
　「若きウェルテル」ポケットに入れ
野獣なら鞭一本で思ふ儘
　暗き瞳の奥に燃ゆる火
賑はひぬ秘仏の眠る鄙の寺
　〇を描きてこれで茶を飲め
月澄めり耳までかぶる冬帽子
　ポインセチアの緋の溢る窓
戦争と平和幾度家族の和
　兄の便りを読んで聞かせる
コンクール入選果たす花万朶
　壺中の天を楽しめる蝌蚪

両吟

原田千町　彌

町　彌
町　彌
町　彌
町　彌
町　彌
町　彌
町　彌
町　彌
町　彌
町　彌
町　彌

聖(ナオ)金曜嘆きの母の子を抱く　同
奇跡にすがり癒す難病　彌
大草原輝きてをり深呼吸　町
包に集ひて馬乳酒に酔ふ　彌
正倉院御物の面に似たる顔　町
セピアの写真口付けのあと　彌
妊りしことの確かに雪の閨　町
夢幻に暮らす幸福　彌
塔の時計ゆっくりと打つ十三時　町
海の都の広場人群れ　彌
又造の月の絵画を寄贈せり　町
穂の立ち枯れて凶作の年　彌
秋(ナウ)更ける虚実の間合ひ見えて古稀　町
ファンレター来る読み切れぬ束　彌
刷子櫛たっぷりと受け栗毛佇つ　町
ふらここはもう誰も乗らない　彌
サーチライト池畔の花を掃いてゆく　町
商ひ成りし頬に柔東風　彌

平成五年五月五日　起首
平成六年六月二十六日　満尾

みせばやを

式田　和子　捌

みせばやを誰にみせばや老ひとり　式田和子
おしゃべり好きの群るる椋鳥　坂本孝子
笛羯鼓月の都に響くらん　和
から拭き雑巾床に柱に　孝
競売に高値付きたり蔵書票　和
頭ふりふり泳ぐ出目金　孝
三社様電気ブランを飲んでから　和
強がってみる姐さんの前　孝
教へたら教へ甲斐ある仲となり　和
晴れて合格天気予報士　孝
マウンテンバイクに七段ギアをつけ　和
別荘地帯八岳の山麓　孝
寒猿のごとく吠えたき月の閨　和
薬湯呑ます木の葉髪して　孝
貫入の巧みに入りし古茶碗　和
吾が祖を訪へば遠き帰化人　孝
楊貴妃と呼ばるる花をここに愛づ　和
画架のほとりにまとふ姫虹　孝

タンカー(ナオ)のよぎりて霞む海と空　同
積荷の中に隠すトカレフ　和
政界の再編成を手中にし　孝
電話番でも金庫番でも　和
雪しんしん乙女心に棲む魔性　孝
しゃぶりつくされたいとすり寄る　和
後朝の乱れ姿で楽屋入り　孝
石の舗装に嵌めし紋章　和
ロマンチック街道の旅母の夢　孝
零餘子飯炊くねえややさしき　和
金堂も塔もしづもる月の影　孝
べい独楽伏せしままに忘れる　和
幼(ナウ)年兵うそ寒の世に生き残り　孝
賞味期間は煙草にもつく　和
ジャズピアノジャックルーシエインバッハ　孝
クロスステッチ繡すも春興　和
糸垂るる人を廻りて花筏　孝
上総武蔵にかかる初虹　和

平成六年十月三十一日　首尾
於　桃径庵

秋江や　膝送り

※秋江や端正の月天元に　蒲原志げ子
葛と薄を揺らすやは風　豊田好敏
総稽古芸術祭も近づきて　篠原達子
鏡はみ出す長身の人　志敏
駅頭にかつぎいさば屋憩ひをり　達
通し燕の並びたる梁　志
※千歳（ウ）の原生林に小雪舞ひ　敏
帰したくない爪弾きと酒　達
浜町は玉三郎に入れあげて　志
野暮なひとほど頑固一徹　敏
閣僚の逆なで失言情なく　小林千雪
蛭に吸はせる肩重き時　敏
婆ちゃんのほまちの畝に月涼し　達
バジリコ風味パスタ大盛り　志
教会の鐘の音町の四方から　金久保淑子
街道筋に検問の兵　敏
走り根に躓きはらと花の散る　達
幼子あやしのどかなる刻　志

※印の句、お判りいただけるでしょうか？

年一回の花の会、今年は二名欠席にて辛いことでした。その内のお一人からは前もって句をいただいて置き、さて当日、なんと前日の大雨で横浜方面線路

木星（ナオ）の織りなすショウか夏隣　雪

お使ひ犬のもらふ骨片　淑

中抜きで読む推理もの味気なく　敏

割り込み電話入ったら切る　達

若い娘の前は素通り出来ぬ質　志

頬かぶりして覗く岩風呂　淑

別姓の夫婦の出せる年賀状　雪

左派の理論を守る党員　敏

禁煙を言はるる毎に余計吸ひ　達

ガン病棟にひそと足音　志

涸沢のガレ場の月を想ひをり　淑

撰集編みて五穀豊穣　敏

ゆく秋（ナウ）のあえかに笑まふ弥勒さま　達

ボストン会場札止めの況　敏

ブリッジのチャンプになった夢なりし　達

春の暖炉の燠をかきたて　志

案内する茶席の庭は花万朶　達

つかず離れず双つ蝶々　淑

平成六年八月二十一日　首尾　敏

於　ホテルニュー神田　雪

浸水不通という。迂回難行がやっと到着し…。そんなわけで少し変わった膝送りです。一生けん命巻きました。※印の句は、お二人の復帰を祈る思いなのです。

篠原達子

雪渓を

副島久美子　捌

雪渓を溶かしつつ瀬の流れかな　副島久美子
エーデルワイス風に小揺れる　原田千町
古代窯調査のいとま憩ふらん　瀧川雅代
きざみ沢庵そへるお番茶　大窪瑞枝
引窓を開き月光溢れしめ　上月淳子
ギターの弦のひびく新涼　枝
敗戦忌知らぬ若者あまたゐて　淳
電車の中の喋々喃々　中川哲
双曲線からまりほぐれまたねぢれ　町
毎正時には人形の出る　淳
バーゲンに長き行列百貨店　代
冷凍鮪鋸で引く　町
除夜の鐘残りの酒をほせば月　哲
スペースシャトル一度乗りたい　枝
逆さまにしてもピカソの絵は名画　代
鴉てふ名の真黒な猫　町
爛漫の古城の花を訪ねけり　代
媼のどかに糸を繰りつつ　枝

帰(ナオ)り来ぬピースボートに春の涛　淳
　鉤鼻紳士洒落で笑はす　同
密売の符牒で刑事すり寄って　枝
　携帯用の吸殻の皿　哲
ご贔屓が中幕を待つ木挽町　同
　旱つづきに恋の狂乱　哲
嘘と知り慣れた手管のエクスタシー　町
　半伽思惟像レプリカで置き　哲
休日は厨房に入る病院長　町
　待宵の客碁石並べる　代
子の丈に合はせて揚げし秋袷　枝
　いという流る故郷の山　枝
半(ナウ)島の丘に風力発電所　淳
　ライトバンにてすみし引越し　枝
飼育班兎に名前つけてやり　代
　柏手のよく聞こえ来る朝　町
つま立ちて触れてもみたき花の枝　町
　雲雀落ちゆく野面のひろやか　枝

平成六年八月二日　首尾
於　俳句文学館　美

白萩や

瀧川　雅代　捌

白萩や風吹き抜くる武家屋敷　瀧川雅代
新涼の縁仰ぐ昼月　篠原達子
片だすき鰡手際よくさばかれて　上月淳子
取材のカメラ変はるアングル　長崎和代
砂漠へと四輪駆動発進し　淳
日焼自慢のいづれ劣らず　同
神田祭先棒かつぐ異邦人（ウ）　和
ヴィトンバッグで釣られちゃったの　雅
酔った振り鍵あけさせて誘ひ込み　淳
棚にずらりと優勝の楯　和
横綱がおあづけとなる貴の花　淳
こむらがへりに頭痛腰痛　達
月冴えて書き疲れたる旅日記　和
南極の基地吊るす輪飾り　達
ハスキーはドッグフードを選り好み　雅
町内集金愛想よろしく　達
石割の花の盛りに連れ立ちぬ　淳
紫煙くゆらせ春惜しみつつ　和

つづら折膝が笑へば山笑ひ　達
　谺返して響く和太鼓　淳
新空港テープカットのお歴々　和
　そ知らぬふりで税の計算　淳
いとはんが駈落ちせがむ葭戸かげ　同
　抱かれし胸に早鐘をきく　達
超音波やっと慣れたる研修医　和
　窓に寄り来て餌ねだる鳩　淳
セーヌ川河畔に並べ絵を売りぬ　達
　水は流れる人は老いゆく　雅
望の月赤子すやすやねむらせて　達
　店の松茸香ばしく焼け　和
奥の院つひに高きにのぼりたる　淳
　友の便りがポケットの中　和
はり切って万年幹事クラス会　淳
　盆石展は午後の二時より　達
散りかかる花に埋もれ講道館　雅
　あとさきになりついて来る蝶　和

平成六年九月二十八日　首尾
於　源心庵

黄落に

豊田　好敏　捌

黄落にまだいささかの伊勢路かな　豊田好敏

松手入れ終へ寂と参道　式田和子

カルテット音揃ふ頃月を見て　杉山壽子

子供と部屋の模様替へせり　池田佳子

心にもなく猫をほめ水を打ち　上月淳子

鰺がぴちぴち引き売りの桶　中田あかり

地鎮祭うからやからの集ふらん　佛淵健悟

旦那の給料ちょっと少ない　中川哲

親が居て婆やを置いて情夫もゐる　武村利子

アラブの民はすべて平等　岡本道子

取りやすきところにいつもベレー帽　本屋良子

錘時計の糸凍りつく　佐藤良彌

月照らす樹氷お伽の国となり　加藤治子

迷路ばかりを歩む物好き　鈴木美奈子

鉛筆の芯をつんつんとがらせて　和彌

食事のメニュー克明に記す　哲

花吹雪クルージングの甲板に　淳

初虹はるか鷗飛び行く

伝統(ナオ)の新車購入春闘後
　まっさかさまに嵌まる六道
八方を踏んで引幕柝できまり
　蚋に刺されて人に掻かせる
野馬追の後も野馬追ふ夕の闇
　耳で聞く息口で吸ふ息
うましくに義左衛門てふ銘酒あり
　鍛冶で鉄砲つくる家柄
勲章を断って夢膨らめる
　ポインセチアの鉢の届きぬ
使ひ捨てカメラに写す望の月
　雀の斑ある湾の蛤
芋(ナウ)煮会故郷の便りなつかしく
　寄贈本解く白きテーブル
タータンのベストのボタン金色で
　行進ばかり日がな練習
花守を市長自称し五期つとめ
　弥生尽なり煙草輪に吹き

平成六年十月二十二日　首尾
於　伊勢神宮会館

道　壽　佳　り　奈　り　彌　和　佳　淳　良　敏　り　同　奈　利　敏　治

牡丹の香

両吟

坂本孝子
中川哲子

墨色の雲の重さや牡丹の香　哲子
　雷はるかにもひびく四阿
シュノーケル岩間の魚に触るるらん　哲子
　吾子の帽子を冠り直させ
おかはりを誘ふ塩味ぬかご飯　哲子
　二合半酒も空いて繊月
悪友（ウ）と自称する奴秋彼岸　哲子
　昔左翼で今フェミニスト
金髪の巻毛枕に残りゐて　哲子
　唇拓のため選ぶ口紅
豆腐屋の喇叭吹きゆく辻々に　哲子
　新富座跡影もとどめず
羽子板の寄り眼が睨む窓の月　哲子
　猫と寝転ぶペルシャ絨緞
ともかくもサミット終へて新総理　哲子
　すったもんだがありましたとさ
散る花に隠れ信徒の塚小さく　哲子
　陽炎まとふ誰がおもかげ　哲子

茶摘唄ロックのリズムまじりゐて　同
遠めがねから覗く世の中　子
お局と言はれて慣れた課長席　哲
肥満血の道漢方が効く　子
妖かしのひそとたゆたふ草いきれ　哲
愉悦むさぼる簀障子のうち　子
春香を語る老人恨の恋　哲
魚醤の匂ふ椀を傾け　子
アウトレットガレージセール軒並べ　哲
符丁で渡す禁制の品　子
月隠す深く吸ひたる紫煙の輪　哲
螻姑よお前も菲才嘆くか　子
敗荷の水辺に立てる石地蔵　哲
けふもすたすた歩くグループ　子
ラブレーの巨人の話まだつづき　哲
指でつついてゆらす風船　子
四斗樽を囲み花見の総踊　哲
吉原雀あそぶ嫩草　子

平成六年五月十日　起首
平成六年十月二十五日　満尾

聖灰祭

中田あかり　捌

つぶらなる瞳ならびぬ聖灰祭　中田　あかり
オルガンのどか絵ガラスの窓　大窪　瑞枝
連翹のたわわな径辿りきて　中川　哲
犬にお預け仕込む楽しさ　上月　淳子
香辛料効きたるシチュー宵の月　副島　久美子
美術展へと頼むトルソー　枝
掌（ウ）のぬくみ残る団栗くれしひと　淳
女先生ちょっとお化粧　枝
恋文を落したことが気にかかり　哲
増減税の行方決まらず　久
上野駅便宜乗車で盛岡へ　同
イラン語話す風呂の番台　哲
月昇る此処にゐるぞと蟇　淳
薪能待つ白砂の庭　枝
着道楽箪笥のこやし増やしつつ　久
煮豆ことこと紙蓋のした　淳
パソコンに化け文字の出て花の昼　枝
斑雪を踏みし少年の頃　淳

脚細き若き栗毛に鞭あてて　哲
　コースをそれて遊ぶ人生　枝
医者嫌ひおどしが利きてドック入り　久
　盗み酒には角の自販機　哲
寒詣り嫂らしき若き声　同
　追ひて出し闇霙頬打つ　淳
浮気虫なだめ切れずに悶々と　久
　戦友名簿一行抹消　哲
水車廻り団子にそば饅頭　枝
　峯に傾むく月を眺むる　哲
拗ねし児をあやし指さす鵙の贄　淳
　紅茸に掛け侏儒笛吹く　枝
漱石の黄ばめる写真全集に　淳
　日毎に替ふる温泉の粉　久
ボランティア自己満足でございます　同
　ごみを集めて貰ふ勲章　淳
花吹雪旅籠の手すり越えにけり　淳
　風をはらみし勝凧の栄え　り

平成六年二月九日　首尾
於　俳句文学館

春浅し

橋野代々子　捌

単線の日溜り席や春浅し　橋野代々子
無人駅舎にはやいぬふぐり　加藤道子
紙雛幼とともに折り終へて　式田和子
アップテンポのCDを聴く　橘文子
大海の波涛砕くる昇り月　高橋信子
今年煙草の噂あれこれ　和
西鶴忌世之介振りに憧るる　文
急に女に変身の彼　同
落ちないが売りの口紅でも剥がす　信
ヒステリックなジャパン制裁　道
エルニーニョ異常天候続出し　和
月光きらり竦む蜘蛛の囲　道
白装束御用提灯屋根の上　代
シルバー券で映画はしごす　信
まったりと旨いなんぞと酒を褒め　和
雅びでおぢゃる猫の鳴くさへ　文
花万朶京の半分旅の人　和
夢のつづきに朝寝たっぷり　文

釣(ナオ)り支度買ひし目張のよく太る　信
点描みっしり画き込みし画家　同
甲冑のナイトが動く古館　道
水鶏たたきて誰を呼ぶやら　和
胸深く棲むひとありと打ち明けて　道
鉄の女の泪愛らし　同
西方の浄土へ辛き氷橋　和
リレハンメルに競ふ若者　文
墨入りのスパゲッティに舌つづみ　信
俳諧連歌清書夜なべに　道
故郷(くに)二つ満月いづこ貴種流離　文
雷鳴もなく走る稲妻　信
バスタブ(ナウ)に湯を溢れさす物忘れ　和
半透明の袋ため込む　文
産土の杜を塒に飛び帰り　道
民話を学ぶ語り部の会　信
高機の棹拍子よく花吹雪　代
茶柱立ちてのどらかな刻　同

平成六年二月十八日　首尾
於　鎌倉おんめ様

冬ざくら

八角　澄子　捌

さざ波の岸に逢ひけり冬ざくら　八角澄子
うなじを伸ばし眠る白鳥　蒲原志げ子
膝前に聞香の盆廻り来て　加藤道子
玻璃戸を開けて子等の呼び声　小野シズ
残月に向ふ三軒路地を掃く　坂本孝子
霧しっとりと吸ひし朝刊　登坂かりん
新酒利く男の素顔生真面目に　権頭和弥
シャツの釦もはめてやる妻　孝
ハネムーンやっと二人のヨーロッパ　ズ
円高還元下がる口紅　道
山ン姥の鏡岩まで造成地　弥
幣ふる彌宜に正す居ずまひ　志
Jリーグ応援合戦月涼し　ズ
売れる浴衣の色豊かなり　孝
缶入りのお茶にしゃべくる京女　志
じんわりと効く頭痛胃薬　孝
花びらの降る庭下駄のあとさきに　弥
つながれ犬にまとふ春の蚊　道

ヨーデル(ナオ)の谷の谺に風光る　孝

諜報部員越ゆる国境　か

首脳陣核の断絶お話し中　ズ

銀紙貼って作るくす玉　弥

寒晒農婦は晴の日を選ぶ　道

肌もて解かん遭難の凍　孝

煩悩を打つ警策の厳しかり　澄

墨痕しるく禁煙の文字　志

半生の哀歓尽きずビルの窓　孝

ゆるゆる坂を急ぐ往診　か

伝へ聞く嫦娥は笑をこぼしつつ　道

ままかり鮨を皿に盛りあぐ　志

秋(ナウ)狂言幟を立つる村の長　ズ

柱ばかりの朽ちてゆく墓　孝

スーパーのレジ日本語もうまくなり　か

午後の湯壺に浸る常連　志

城跡の石に枝垂るる花万朶　澄

せどにはほのか亀の鳴く頃　か

平成六年一月十九日　首尾

於　江東芭蕉記念館

遠筑波

原田千町　捌

遠筑波蒼々けぶる芒種かな　原田千町

植田豊かに広がれる里　倉本路子

ギター聴くワインゼリーをふるはせて　坂本孝子

ブックエンドをすこし動かす　橘　文子

猫二匹月あるうちは屋根にあり　市野沢弘子

どんぐり独楽が子の宝物　加藤治子

秋狂言仕たておろしを身にまとひ　孝文

地下鉄口のひどい混雑

ダイエットし過ぎて彼はおみそれし　弘孝

危しきことを聞き糺す医師

「あれ」は「これ」側近だけに解る「あれ」　文孝

立木観音半眼の笑み

月のもと踏みしだくなり初氷　路孝

鴨南蛮に七味たっぷり　治弘

浪人の問題集のめくれ癖

相続税はどこも物納　治路

平安宮朱塗りに映ゆる花万朶

春日遅々と吾をすぎゆく

鯛網を曳くもオーレとサポーター　文
血が呼びたてて踊るジプシー　孝
出張の筈でありしを住みつきて　弘
けふの暑さに絹の褌　孝
念入りに男の指が洗ふ髪　路
女帝の嫉妬とぐろ巻きたる　孝
揚子江下る筏に豚を乗せ　路
戦後の記憶綴る新作　弘
アドリブのニュースキャスター流行っ児　文
嘘こらへて呑ます散薬　同
黒松の幹に月さす営林署　孝
邯鄲の鳴くとぎれとぎれに　弘
障子張り留学生も手伝うて　治
唯の人だが御立派な髭　同
晩酌はほんの一合にてたれり　孝
水濁らせて太る川蜷　路
城ありし時世の夢を花の咲く　町
遍路の旅も無事に結願　治

平成六年六月八日　首尾
於　俳句文学館

山茶花や

東　郁子　捌

山茶花やひそと翁の四吟碑　東　郁子
残る虫鳴く風狂の旅　武村利子
窓近くソファーに体沈めゐて　本屋良子
見る人もなきニュース流るる　織田康子
月上げて校歌で終る同級会　長谷川芳子
初獵にゆく話まとまり　中村テル
みちのくの並ぶ藁塚武者構　浅井沙衣子
絵筆に紅をたっぷりとつけ　杉山壽子
あれこれとデートの宿を選びをり　木股きよ子
百面鏡に笑ふあつあつ　山田歌子
願ひ事千手観音人溢れ　利
噴水高くふきあぐる月　細川研三
ジャワ島に集ふ宰相生ビール　良
丁々発止やりとりの妙　くのあや
やり直し駄目だよ子らのへぼ将棋　ル
産直の魚宅急で着く　大谷規美子
根尾の花語り部めきて枝を張る　康
野外の能をめづるのどけさ　良

朝立ちのキャンピングカー春スキー　よ
即席麺に熱湯をさし　衣
揉手して値をふっかける骨董屋　三
盗作をした博士論文　良
聖堂のクリスマスツリー遠く見て　衣
嘘する猫洟垂らす犬　田々宮かんばし
操れる陰の男が恋に落ち　利
婆洒落をして奪ふ義兄様　壽
沢水で洗ふ絹布の草木染　宮川　侊子
始末に困るファックスの束　猪子春治
莫逆の友と月光浴びてをり　壽
肩叩かるる身のそぞろ寒　美
烏瓜枯れてなほ彩のこしつつ　森岡しげる
宇宙にかける少年の夢　し
ステッキを振れば袖から鳩が出る　芳
丘の上より鐘霞むなり　田部みどり
曲水の緩き流れに花吹雪　郁
蒔絵の椀に蛤汁を注ぐ　歌

平成六年十一月十六日　首尾
於　名古屋住友クラブ

アクロポリス

両吟

原田千町
福井隆秀

清澄のアクロポリスを恵方とす　秀町
　初茜せる東の空
文机白玉椿活けられて　秀町
　絵凧作りの糸を括りぬ
弥生尽口遊みたり月の歌　秀町
　ソースの味がシェフの御自慢
含羞（ウ）に笑む谷崎のフォトグラフ　秀町
　頬摺りしたき美しき蹠
真珠採りの少年慕ふ乙女たち　秀町
　スコッチよけれ地酒またよし
新宿の迷路迷うて汗みづく　秀町
　月の夜店に並ぶ盗品　秀町
厨子の奥定かならねど観世音　秀町
　「大和」沈めどわれ生きてあり　秀町
糾問に窮鼠が猫を噛んで逃げ　秀町
　バブルの付けに悩む銀行　秀町
花の宴ただたまゆらの夢と過ぎ　秀町
　畑打ちつ読む応仁の乱　秀町

教頭(ナオ)の魚拓整理の春休み　同
　電子レンジのチンと鳴りたる　町
内視鏡結果いかにと病院へ　秀
　うらやましきは蛇の冬眠　町
サハリンに外套の裾ひく囚徒　秀
　互ひに交はすひたの眼差し　町
恋得れば五衰至るも衰へじ　秀
　形状記憶合金もあり　町
ギャンブラー配るツーテンジャックの札　秀
　鳩吹く合図に現はるる影　町
悽愴の月やかかれる偏奇館　秀
　蘭の香りの深くただよふ　町
那智黒(ナウ)の石を磨きて秋惜しむ　秀
　シェーンベルクを聴けばこほろぎ　町
火ともなり水ともなりて人の死よ　秀
　〇△□禅(アルサンシカク)の問答　町
会心の一首ものせし花の郷　秀
　仔馬うながし歩む親馬　町

平成六年一月十三日　起首
同年十月九日　満尾

秩父路

秩父路や迷へば花のつむじ風
　かはるがはるに森の囀
夏近きコーヒーミルクのかろやかに
　撮りためてある写真広げる
をさなどち月の出までを語るなり
　天幕を張る砂丘やや寒
砲門の台座に動くちちろ虫
　電話混線車走らせ
釣書は書かぬと次女も言ひはりて
　イタリアオペラ恋を朗唱
国連はなほ駆けひきで明け暮れる
　とらはれ人を照らす夏月
粗忽なる鍼で動かぬ殿の犬
　そっと変へたる漏刻の向き
折伏はまた振出しに戻るらん
　キャンパスライフカード欠かさず
久々に「桜の園」の演しものを
　大家の婆がこねる草餅

独吟

佛淵健悟

連凧(ナオ)の数競ひあふ西の浜
紐のちぎれた靴に春雨
鳩小屋の中の男が会釈して
物納にする段取りがつく
板壁に虚空をにらむ般若面
こがらしの中小走りに逢ひ
うれしさは失ふもののなきふたり
みづちを祀る沼の伝説
合宿で始まってゐるおいちょかぶ
皇太子またプレス出し抜き
月光に向けてワインをかたむけぬ
黄落の庭名車再生
明治節(ナウ)移民の覇気を胸中に
士族は貧に耐へるつっぱり
長椅子は双子のための滑り台
ボランティアにも迫る卒業
奇術師の触るれば花の小枝なる
飛行船ゆくうららかな昼

平成六年四月十三日　起首
平成六年四月二三日　満尾
於　西新宿「宿六」

阿波踊り

本屋　良子　捌

阿波踊り夢のなかまで鉦太鼓　本屋良子
人無き桟敷照らす半月　船渡文子
秋なすび色鮮かに漬けるらん　瀬尾千草
つとめに励む陰の気配り　成瀬貞子
四世代揃ふ要のちゃんちゃんこ　川沼敦子
長屋門へとつづく雪道　草
難民の怒涛のごとく押し寄せて　貞
新妻残しルワンダに発つ　良
ロケットに熱きふたりの思ひ込め　敦
頬の笑窪は今もそのまま　草
ぼろぼろの枕代りの広辞苑　貞
楔形文字並ぶ陶板　文
笛を聴く野外劇場月涼し　草
息をころして蝉生るる刻　良
外出はパンツルックが最高よ　文
ゆっくりじっくりヨガの講習　貞
花影に薄目をあけて貰ひ猫　松村あや
縁側の子らしゃぼん玉吹く　敦

境内に徳利提げて春惜む　柴田由乃

宝物殿の古き能面　文

このごろは夜毎あやしき鳥の声　沖津秀美

駄菓子を包む広告の紙　乃

OLと煙も立てず深い仲　敦

氷も溶かす妬心かくして　良

新調の着物きりりと初点前　草

プルシャン・ブルー耳のある壺　や

飲まず打たず買はず残さぬ一生なる　貞

納得いかぬ消費税論　乃

イチローの快挙称へて月に酌む　敦

風のまにまに揺れる穂薄　美

蓑虫の世にもつまらぬ貌をして　敦

叙勲ことわる喜寿の反骨　貞

後継者やうやく育つ和傘作り　文

声変りしておふくろと呼ぶ　敦

花万朶芭蕉の句碑の古き石　良

鰊そば食ぶ南座の角　や

平成六年八月二十五日　首尾

於　岐阜華陽公民館

白もくれん

矢崎　藍　捌

白もくれんひたすら咲くや城下町　柴田　初美
木戸のしめりもあたたかきころ　矢崎　藍
乳離れおそき仔猫を貰ひきて　八木　聖子
彫金ドリル鈍く響かせ　井川　啓
試写会のはねし雑踏月の下　永坂　博美
大甕のかげ残る蚊のあり　山田　たみ子
葡萄園落果積まれて香り立ち　後藤　志津枝
愛した記憶だけが鮮やか　聖
冷たくて少し頑固な若社長　藍
飲まん今宵は茜さすまで　啓
高層のミラーガラスに夏の月　初
伸び上がりゆく噴水の芯　同
友のもと訪へば帰省子ぬっと出て　聖
観光客をかもにするとか　博
与野党の攻防続く米談議　同
末黒野をゆく水の清くて　啓
花万朶声色使ふ太郎冠者　同
幼児の耳のうぶ毛にも春　枝

'93「とよた連句恋々まつり」にも参加された豊明市連句講座が、翌年四月に自主グループを作りました。連衆の初美、啓、博美、たみ子の皆さんは、その中核ですぐ捌をせねばならぬ立場。事前の三月に歌仙を一気に巻く

遠山に五重塔の霞む道　た
　能登をさしゆく列車三輛　聖
古稀過ぎて働く意欲また新た　博
　幽界の父母そばにまします　聖
雪ふぶく天と地の声混ざり合ひ　同
　うるめ鰯の燃えてちりりと　藍
恋多き女とひとにいはれつつ　枝
　すべての男振り向かせたい　枝
遺失物置き場の傘の縞模様　博
　いつ閉めるのか寄席はひっそり　藍
窓に月病は遅々と癒えずとも　聖
　親子揃って渡る雁がね　た
離郷幾秋香具師にして持つ一家言　博
　経済学者とかく金なし　聖
ダンプカー土こぼしゆく昼下り　藍
　名代の餅で薄茶おかはり　初
夢うつつ虻のうなりの花の中　た
　エーゲの海に風光るらん　枝
　　平成六年三月八日　首尾　啓
　　於　不善庵

経験を――ということでできた座です。ころもの聖子、志津枝も「私たちの連句青春時代を思い出しちゃった」と感想をいう程、新人の熱気うれしい座でした。以後とよあけ連句会三十人、ころものよき友として勉強中です。

（藍）

風の道

山崎　一恵　捌

みぎひだり揺れるコスモス風の道　山崎一恵
のしめ蜻蛉の群るる昼月　下坂元子
土瓶蒸し香り楽しみ作るらん　須田智恵
頬杖ついてCDを聞く　副島久美子
気の合ひし友達同志登山宿　久
麦稈帽子少しへこんで　元
神父様長き裳裾をひるがへし　智
忘れられない深き瞳のいろ　元
改姓も入籍もいや今のまま　久
ルワンダ行きは機銃一丁　元
又しても政治献金免罪符　同
池の主なる鯉に餌をやり　久
掃き初めの縁に月影浴びながら　同
文旦漬を選びゐるひと　智
大壺も小壺も焼きて登り窯　同
尾を高々と上げし黒猫　元
花吹雪スケートボード賑やかに　智
乳母車押す陽炎の中　元

農具市高枝鋏売られゐて　久
紙のパックの水の自販機　元
張り込みの猛烈記者の不精髯　久
胃の腑の有処いつも気になり　智
当麻寺の菩薩来迎おろがみぬ　元
灯に透く守宮じっと動かず　久
振りほどくふりして抱かれ蜜の味　智
優しく包む彼の体臭　恵
リモコンをポンポン押して画面変へ　久
主婦感覚の欲しいヤンママ　同
満月のいびつに浮かぶ露天ぶろ　智
故郷の新酒の苞とどく頃　元
鵠高音句集編纂進みをり　久
夢見心地に貰ふ賞状　智
小学生向井千秋をお手本に　元
棚に並びしパイプさまざま　智
曙の光りあふれる花の尾根　恵
遠会釈する人ののどらか　智

※ヤングママの事

平成六年九月二十八日　首尾
於　源心庵

古き墓

若尾よしえ　捌

新宅に入るや訪ひける古き墓　若尾　よしえ
夏萩こぼるる敷石の上　金久保　淑子
登山杖並べ売り居り道端に　瀧川　雅代
ポンポン菓子の音に驚く　杉山　寿子
宇宙船今宵の月は如何ならん　内田　麻子
平均寿命のびてやや寒　豊田　好敏
落鯛（ウ）は目の下二尺釣り自慢　代
すったもんだの恋の成り行き　寿
名のみなる妻の座ちょっと危うくて　麻
かくれん坊の鬼の泣き出す　淑
神護寺の森うっそうと大鴉　代
火の番小屋で酌み交はす酒　敏
凍て月に観光客はプロバンス　同
からくり人形出ては引っ込む　代
閣僚の名前覚える暇もなし　淑
ソプラノ響く議長土井さん　敏
佇ちつくす分教場の花吹雪　寿
野性のままの仔馬親馬　敏

春（ナオ）スキー何時もの友と夜行バス　麻

吸はせて下さい煙草一服　淑

刺青は倭建命（やまとたける）の勇姿なり　敏

冷水摩擦に励む父親　代

無線機を頼りに海峡横断す　同

金比羅さんのお守りを下げ　麻

髭も好き短足もよしお年頃　寿

ぴたり寄せくる胸のふくよか　代

サーカスの去り行く町は人気なく　敏

痛風故に残る団長　麻

割ってみる西瓜泥棒月を避け　淑

疎開の昔偲ぶ虫の音　代

秋（ナウ）団扇猫とテレビを見るソファー　代

ぼけとつっこみ息もつかせず　麻

ぽちぽちと増える気配の消費税　敏

針の供養にねんごろな祖母　代

満開の花の下にて昼の宴　麻

埜（の）遊びあとの濃ゆきコーヒー　寿

平成六年七月二十日　首尾

於　江東芭蕉記念館

◇源　心◇

花翳し

両吟

片山　多迦夫
東　明雅

言祝ぐや古稀と傘寿の花翳し　迦
樽酒酌めば笑ふ山々　雅
巣づくりの眼鋭き鷹ならん　迦
オリンピックの準備始まる　雅
柱廊（ウ）にアテナの像を飾る月　迦
ゑのころ草に露がびっしり　雅
放浪記読み進むほど冷まじく　迦
どさ廻りにも馴れしこのごろ　雅
浮気癖今更許す許さぬも　迦
外面如菩薩うちの女房　雅
今あればいかなる人ぞソクラテス　迦
豪雨沛然雷鳴のあと　雅
握り飯お花畑に転げゆき　迦
鼻も天狗に似たる先達　雅

肩書（ナオ）は次席といへど独裁者　同
銀座マダムを必殺の業　迦
一に押し二に押し三に引くことも　雅
魚鱗の陣に鶴翼の陣　迦
Jリーグ少年の夢ふくらませ　雅
塾帰りなる白き息吐き　迦
大屋根に夕月と猫覗きをり　雅
めらめら燃えて消ゆる送り火　迦
旅に病み旅に死にたる秋遍路　雅
青苧粗麻を織りし生涯　迦
胸飾（ナウ）る紫綬褒賞も晴がまし　雅
御所の真砂に蝶の漂ふ　迦
しづ心なく散る花はひもすがら　雅
惜春の詩をしるす絵葉書　迦

平成六年二月　起首
同　六年九月　満尾

八千草

梅田　利子　捌

八千草の香も懐かしや花の径　梅田　利子
夕月かかる梢の蜩　金久保　淑子
秋袷仕上げの躾終へるらん　雑賀　遊
厚切羊羹お茶を濃く入れ　桑原　正敬
本堂（ウ）の重き襖をずいと開け　同
聞き咎めたる小さきしはぶき　遊
酔客に絡まれてゐるＯＬ嬢　敬
夫信じて幼妻待つ　淑
伝書鳩決った刻に輪を描く　遊
湖底に消える村と決別　敬
駅長は何でもこなす赤字線　淑
ヘクトパスカルにらむ天気図　遊
重文のブロンズの像花の雲　同
春の日傘の模様水玉　淑

宝貝（ナオ）拾ふ入江に潮寄せて　同
ゴンドラに揺れカンツォーネ聴く　敬
先行きはあなた任せの首相様　利
自己満足の円相の出来　遊
窓ごとに異なるたつき月涼し　敬
指輪緩びぬ夏痩せの嫂　遊
子の様な若きラマンに入れ上げて　同
場末のホテル犬の遠吠　利
休日は医療活動奉仕団　淑
独り暮しに情うれしき　同
山峡（ナウ）をたどりて行けば隠れ耶蘇　敬
卒業成りて夢のふくらむ　淑
初花の咲きし一枝影もなし　利
籠に盛られて届くあいなめ　遊

平成六年八月三十一日　首尾
於　源心庵

神迎

大窪　瑞枝　捌

源心の巻供へばや神迎　大窪瑞枝
晴れて隈なき寒凪の池　長崎和代
一輪車乗りまはす子の得意気に　篠原達子
頬ばり止まぬポテトチップス　副島久美子
ひ(ウ)としきりつくつく法師鳴きさかり　達
休暇明けなる彼女まぶしく　同
月光にそそのかされた不意のキス　久
十円コピー待てるやや寒　達
政界の刷新なるか新進党　久
ぼけとつっこみちょっとずっこけ　同
片蔭の引売囲むご定連　和
ぽつぽつビルに変る町筋　同
土俵入四股高々と花を浴び　久
盃廻す囀の下　和

東風（ナオ）誘ふ気儘な旅は鈍行で　久
巡回保健婦デイパック負ひ　達
猫又の棲処と言はれ屋敷林　同
空の柩を照らす凍月　和
抱かれる度に肉むら細りゆき　同
あっけらかんと下着売るなり　達
ひらひらと岩に群がる熱帯魚　久
ユンタ歌ひし梯梧咲く浜　久
少年に護国の夢の凛々しかり　和
模型飛行機住職の趣味　達
年金（ナウ）で出来る利殖を勧められ　達
具もたっぷりのおから煮き上げ　和
花の雨もとほる傘は松園か　久
遠き鼓のおぼろおぼろに　瑞
平成六年十一月三十日　首尾　達
於　源心庵

孟秋や

孟秋やひと雨欲しき地の渇き　蒲原志げ子

白き昼月ひぐらしの里　長崎和代

マッシュルーム宅急便で送るらん　篠原達子

孫の喜ぶ玩具あれこれ　桑原美津

縫物の針止めて見る掛時計　山崎一恵

彼から電話不意の残業　志

恋人は気象予報士なり立てで　代

夫婦別姓家賃折半　恵

夏に入り株価少々持ち直す　達

土用芝居のお岩好演　志

横町のお稲荷さんにお参りし　恵

調子はづれにピッコロを吹く　代

颯爽とバトン・トワラー花万朶　恵

草のだんごは早も売り切れ　達

桑原　美津　捌

旅衣(ナオ)ばたばた払ふよな埃　志

亜細亜諸国へ詫びる宰相　同

戦犯の罪贖ひし獄舎(ひとや)あり　恵

籠の鸚鵡の般若心経　代

炬燵出るどっこいしょっと月仰ぎ　達

手びねり徳利熱燗を酌む　代

もて過る事が不満と云はれても　志

源氏の君の轍八方　達

待ち時間お供は誰と睦むらん　同

重ねし日記繰ればうたかた　恵

仔(ナウ)犬の名考へあぐね猫とつけ　代

こんがり焦茶食パンの丘　達

花前線これで終りとオホーツク　同

朝寝の夢は皇居回遊　津

平成六年八月三十一日　首尾

於　源心庵　代

ビスクドール

ビスクドール木椅子に飽きし暮春かな　米谷貞子

目借蛙のひそむ庭隅　坂本孝子

刈安の染あたたかき絣着て　貞

珍客あれば味噌焙るなり　孝

寒月に三輪そうめんの蔵白く　貞

夜間飛行の赤き点滅　孝

ぬけぬけと嘘つく人の片ゑくぼ　貞

恋の脅しに見せる剃刀　孝

太棹の撥のさばきも音をしづめ　貞

総理の背後舵取りの影　孝

あめんぼう流さるるやら止まるやら　貞

この世に注ぐ弥陀の半眼　孝

杖納め立つきざはしの花吹雪　貞

書架の黄塵払ふそばから　孝

文音

校風（ナオ）に慣れゆく子等に夏近し　同

Jリーグの券胸のポケット　貞

かくし芸福沢諭吉消してみせ　孝

美女もまじりて禁煙の席　貞

神山の嬢歌はてたる闇深く　孝

肌にさらりと触るる紗袷　貞

亡き妻に形ばかりの操たて　孝

空となりたるコニャックの壜　貞

夕映えに薄れて高き古都の月　孝

天鼓の扇開く露寒　貞

秋興（ナウ）を尽くし傘寿の肩揉ます　孝

税率変はり直す遺言書　貞

花一輪あまごの皿に彩を添へ　孝

毛馬の堤にもゆる陽炎　貞

平成六年四月十七日　起首

平成六年七月十八日　満尾

青鷺

須田智恵

町川や青鷺一羽吹かれ立つ

芦の葉騒も秋近む頃

瀧川雅代

打連れてヨガ道場に通ふらん

中田あかり

窓越しに聞く竿売りの声

桑原美津代

買ひたての天体鏡に夕の月

丸ぽちゃの娘は藷が大好き

手を取りてそっと逃げこむ稲積の陰

戦争ごっこの作戦を練る

そそり立つアイガー北壁雲涌きて

XYZ飲んで眠らう

経典の奥の真理をはかりかね

硯の海にはられたる水

市松の金銀の帯花衣

東踊の囃子にぎやか

須田知恵抄

春闘（ナオ）に共に旗ふるイラン人　同

メガホン目鏡忘れ物あり　り

特注の伊万里骨壺ひけらかし　代

まぐれ当りに引きし富籤　同

迷ひ子を探す高札残る宮　り

幼ななじみの今は王妃に　惠

舞踏会仮面どうしの喃々と　津

近づきてくる犬橇の鈴　同

月さやか寒天小屋の板の壁　り

※ぶるぶる※さばりふるへ止まらず　津

ささくれ（ナウ）に絆創膏のぺったりと　り

小さなきしゃご引出しの奥　津

花の宴潤一郎の「細雪」　惠

よそゆきの靴汚す春泥　津

平成六年七月二十七日　首尾

於　源心庵

※XYZ＝強いお酒

※ぶるぶる＝妖怪

※さばり＝さわりの方言

かぎろひて

下坂　元子　捌

かぎろひて流るともなき大河かな　下坂元子
若菰を分け漕ぎいづる舟　瀧川雅代
獨り居に松蝉の声届くらん　雑賀遊
薄茶を点てて打菓子の鉢　副島久美子
深雪晴友待つ縁に月煌と　長崎和代
フィッシャーマンの厚地セーター　須田智恵
フィヨルドの奥に愛の巣ひっそりと　雅
国も名も捨て守りたる恋　久
微笑佛鉈一本で彫りつづけ　和
やませ吹くともかかはりもなし　智
航空機事故に新聞全頁　遊
ナナハン駆ける高き爆音　和
花万朶人にもまるる段葛　雅
子の手放れて飛べる風船　遊

ジェンナー（ナオ）の種痘も今は語りぐさ　雅

鳩とまりゐる銅像の上　遊

相続が争続となる旧家にて　久

母系家族の婿の切なさ　智

蛍来て閨のムードはなほさらに　久

役者遊びも山の湯の町　雅

窯出しにめぐり逢ひたる美術商　智

馬刀葉椎（まてばしひ）の実ばらばらと降る　遊

新走り神に捧げる月の夜　久

湖北あめます串打ちて焼く　和

甘え（ナウ）寄る猫抱き上げて老いし父　遊

太棹の音の腹に響ける　和

文机に仮名の連綿花の舞ふ　元

春の日傘の通る生垣　智

平成六年四月二十七日

於　源心庵

紅葉かつ散る

紅葉かつ散る汐入りの池閑か　下鉢清子
水尾ゆるやかに流る初鴨　瀧川雅代
幼な子は月を取ってと指差して　山崎一恵
ピアノ連弾姉と妹　上月淳子
十号（ウ）のムンクの模写を壁にかけ　長崎和代
西洋懐石割箸で食べ　同
あそこでとだけで通じる内線で　下鉢清子
記者を捲いては忍び合ふ仲　瀧川雅代
ナナハンとパジェロ寒風衝いてゆき　山崎一恵
円高輸出つづく底冷　上月淳子
うゐの山慈母観音ををろがみぬ　長崎和代
温泉（ゆ）で酌む酒を猿がうらやむ　同
銀髪の叙勲の人に花の舞ひ　瀧川雅代
春のショールは淡き水色　山崎一恵

下鉢　清子　捌

連(ナオ)れ立ちて錦小路に諸子買ふ　淳
癇癖(くせものがたり)談無理に聞かせる　同
昨日(きそ)は鬱けふは躁なる更年期　和
ギヤマングラス月に煌めく　恵
ロカ岬夏草深く塔高し　淳
目がものを言ふ異教徒の女　恵
じれったい道化役者の片想ひ　和
大辛カレーもてあましをり　恵
雪吊りの松が一本築地塀　雅
秘密会談果の新党　恵
マラソン(ナウ)の抜きつ抜かれつゴール前　雅
麩まんじゅうが顔にべたべた　淳
滝ざくら満開の花夢に見て　清
養蜂箱が畑に並びぬ　和

平成六年十月二十六日　首尾
於　源心庵

野紺菊

野紺菊手折りて帰る散歩かな　雑賀　遊
つづれさせ鳴く沓脱ぎの陰　百武冬乃
月の縁棋士に一局学ぶらん　峯田政志
小酌なれどほろと酔ひをり　八角澄子
お揃ひを着てよく似たる姉妹（ウ）　遠藤央子
髭の野郎が送るウインク　澄
コンボイのサーヴィスエリア発進す　乃志
青木ケ原も開発の波　
大鴉羽ばさばさと気味悪し　央
寒風の中励む拳法　乃
神楽笛後継ぐ者のなきままに　央
ブロンド少年正座きっちり　乃
花の山キャンバスに彩重ねゆく　同
遠くの里に霞棚曳き　央

雑賀　遊　捌

旅(ナオ)の果知らぬ同志で喰ふ菜飯　志

犬好きに寄る百匹の犬　澄

奪衣婆の洗濯板のやうな胸　遊

人工透析やっと了りぬ　乃

ルワンダに行きたくなくて嘘をつき　澄

蜊蛤の籠覗く月光　同

夏休中に確め合ひし愛　乃

きのふの夢を話す嬉しさ　志

巨人軍苦戦の末に優勝し　遊

香りの高き卓のコーヒー　澄

障(ナウ)害児抱へ生命を見据ゑをり　志

交通安全配る風船　同

すっきりと雨の上がりし花の昼　遊

馬刀貝探す引き汐の浜　澄

平成六年九月二十八日　首尾

於　源心庵

春日和

杉山　壽子　捌

桃植ゑて三とせとなりぬ春日和　式田和子
すくすく育つ雛の客達　杉山壽子
川面には大学レガッタすべるらん　武村利子
ＢＧの曲ゆるく軽やか　細川研三
口切りの茶事の終りに月出でて　山田歌子
双人で巻けるショール窮屈　田部みどり
ばついちで結婚指輪またもらひ　織田康子
犬に曳かれつ新団地道　歌り
農政の無策外米買ふはめに　三
今は昔に「純綿」と云ふ　利
お薬師や延命仏と婆梯子　同
ポッシェの中のメモを取り出し　三
シャンデリア煌めくロビー花氷　歌
夏狂言の顔のおだやか

海外（ナオ）にいっそ飛び立つ話来て　三
　万里の長城しまく初雪　り
大勢を乗せた自転車疾走し　壽
　形状記憶ワイシャツの謎　歌
愛猫が不倫の匂ひ嗅ぎわける　利
　奪った奪られた冷まじき記事　壽
月曇る集合離散きりもなく　歌
　秋が淋しいパパの靴音　利
魑魅魍魎イッキイッキと酒呻り　歌
　まな板の鯉覚悟決めかね　康
知（ナウ）らぬ間に古稀となりたる齢にて　三
　夢は正夢合格の報　康
花吹雪お城の門をくぐり抜け　り
　神の鈴振る佐保姫の村　利

平成六年三月九日　首尾
於　名古屋住友クラブ

秋薔薇

中島　啓世　捌

秋薔薇文学館は俳句展　牧岡歌子

枝うつりして谷戸の色鳥　橋本満喜

月を待つ今宵うれしき事あらん　橋本六三

ザッハトルテに午后の紅茶を　井上哲也

タラップ（ウ）に髪なびかせて少女来る　藤田克子

ふたりに小さき折たたみ傘　満

さらさらと薄暑の帯を解きしひと　歌

ウインドサーフィン江の島の陰　六

英会話いざといふ時口に出ず　克

血すぢ三代続く俳人　哲

賑やかにバーベキューなどいとこ会　満

少し訛りてふる里のうた　歌

加治川の清き流れに花筏　六

燵（ひうち）灘より鯛の浜焼　満

独(ナオ)り寝の春眠さめず山の宿　哲

石に目鼻のあるを拾ひて　歌

どう見ても本妻よりもみめ劣る　満

旅が終れば別々の家　克

鰭酒を熱燗にして床につく　六

朝日がとかす氷柱光れる　哲

還暦の皇后様の紅薄き　歌

今年は豊作米価上らず　六

ずんだ餅並べ供へる月の茶屋　哲

角を切られし鹿のかろやか　歌

フィヨール(ナウ)ドの鷗いつまでついて来る　満

イースターハット埃はらひて　六

勤行の鐘鳴りわたる花の寺　克

風船飛ばそ七回の裏　哲

平成六年十月二十一日　首尾

於　藤沢橋本家

オリオン

オリオンの凍てせつせつとコップ酒　佛淵健悟
馬橇の鈴の過ぎる横丁　百武冬乃
刷り上る詩集の香り濃くありて　悟
電子手帳に予定打ち込む　乃
さはやかに開く国際見本市　悟
薄茶の席に飾るみそはぎ　乃
蟄居するガラシャの閨を後の月　悟
かもじ投げ出す鏡台のうへ　乃
因業な土地ころがしはけふで止め　悟
登山仲間はみんな熟年　乃
会ふ度にベジタリアンの講釈を　悟
湯沸室で噛るハイシー　乃
大時計花降る昼に止るなり　悟
春の愁の北都札幌　乃

文音

ジョギング(ナオ)は初虹の弧をま向ひに　同

護身拳銃尻にかくして　悟

遺伝子を組み換へた亀飼育中　乃

人里遠く離れ棲む夫　悟

年の瀬のアダムのリンゴ撫でさせて　乃

ＡＶモデルパブで見つける　悟

赤錆びた鉄の階段２ＤＫ　乃

未来都市から届く想念　悟

月の出の海に奏でむサキソフォン　乃

鮭網漁につかの間のひま　悟

ふるさとは父母老いて遊絲舞ふ　乃

運転免許近き更新　悟

通り雨青葉の花もかがよひぬ　乃

校庭を飛ぶ夏のつばくろ　悟

平成六年二月一日　起首

平成六年十月八日　満尾

紅葉狩

峯田　政志　捌

我も児等と源心庵に紅葉狩　峯田　政志
池の畔を走る鶺鴒　雑賀　遊
朝月夜締切り迫る稿成りて　副島　久美子
電子レンジで焦がすトースト　須田　智恵
Gパンの大工軽々棟渡り　遊
新車初乗り新婚の旅　美
耳たぶに触るる吐息のこそばゆく　豊田　好敏
テレビ独占日本シリーズ　恵
虎猫のひがな一にち暖炉上　遊
下総ならひ漁船漕ぎ出す　美
腰痛の婆はとことこ氏神に　恵
奉納の歌上手い毛筆　敏
花筵たしなめられるいっき呑み　恵
固く蓋閉ぢ栄螺夢見る　遊

春愁（ナオ）のモジリアーニの女人像　同
古道具屋でギロチンを買ふ　敏
地下室は私ひとりの遊戯場　美
指先のない赤い手袋　遊
北鮮のトップの言葉まだ聞けず　敏
女狂ひも甲斐性のうち　美
痩せがまん義理だけなのと妻の座に　惠
浮人形を照らす夏月　敏
スキューバー・フィンにゴーグル・シュノーケル　遊
客のまばらな除幕式なり　敏
故郷（ナウ）の山容角度変へて撮る　美
会話短し「どさ」「ゆさ」で済み　遊
メヌエット閑かに流れ花の午後　志
足長蜂のかすめ飛ぶ縁　惠

平成六年十月二十六日　首尾
於　源心庵

◊二十韻◊

落葉道

両吟

逢ひに行く黄金（きん）の銀杏の落葉道　東　明雅

立冬の旅デイパック負ひ　秋元正江

盤の上石音高く響くらん　雅

烏龍茶と肉饅の味　江

ニュー（ウ）ハーフどこか甘くて妖しくて　雅

小指を曲げる癖がついつい　江

文殊様何から何までお見通し　雅

シューマンの曲流れ来る廊　江

ビール乾すベニスの宵の淡き月　雅

仮面売るなり夏衣きて　江

ひとり者句帳片手に猫を撫で　同
尾崎放哉労咳で死に　雅
連絡船どっと乗りたる子供連れ　江
踊の笠に恋の紅紐　雅
半月にあのぬくみこそ山の神　江
地下道に住み夜寒きびしき　雅

けち暮し戒名までも己つけ　江
新入社員青い背広で　雅
桜川狂女の掬ふ花無尽　江
水にきらきら上る陽炎　執筆

平成六年十一月十九日　首尾
於　鹿教湯病院

秋雲に

浅賀　淑代　捌

秋雲に貝塚息吹影連ね　浅賀　淑代

名残の月を待てる縁先　市野沢　弘子

大魚籠の真鯊からりと揚ぐるらん　五味　蓉子

有線放送ながすお知らせ　おおたけんのすけ

石(ウ)の道跨ぐ此処より聖バチカン　弘

嘆きのマリアわが妻に似て　代

脹(ぶく)よかな背を見せ帯をたたみをり　け

夏を惜しめる子等の絵日記　蓉

かたつむり枝に並びて眠りゐる　弘

パワーシャベルが山を削るも　け

ふるさとの墓に供へし吟醸酒　弘

野球で母校名を轟かせ　蓉

教はった「恋ふ」の活用上二段　代

おづおづ抱かる初雪の夜　け

月冴えてお琴佐助は主従なり　蓉

猿軍団の稼ぎ十億　弘

しっかりとカルシウム取り老に入る　蓉

春の叙勲の噂まことに　代

越天楽貴やかに舞ふ花明り　け

巣立ち間近の鳥の顔出す　蓉

平成六年十月二十二日　首尾

於　大原会館

雪しぐれ

夕暮や芭蕉碑濡らす雪しぐれ　猪子春治

蓑欲しげなる忰かめる猫　杉山壽子

座敷から幼呼ぶ声きりもなし　大谷規美子

ミルクセーキをふはふはにして　長谷川芳子

猪子　春治　捌

落慶（ウ）の法衣の彩を照らす月　宮川侊子

草紅葉分け思ひ人来る　丹下敬子

泥んこの足洗ひ合ふ秋湿　鎌倉かよ子

殿様総理焦る改革　美

鍵しまふ抽出少し開いてゐて　敬

毒と薬を計る天秤　美

城壁（ナオ）を登りつめたる蛇見つけ　壽

昼月かかる軒に風鈴　芳

文楽の木偶に恋する主使ひ　壽

太棹の音が煽る老いらく　よ

耳痒し何か良い事聞けるかな　治

山のあなたに幸が住む　芳

道楽（ナウ）の息子さっさと留学す　侊

春のスキーの予定組み込む　同

銭湯の話題しきりに花の事　治

畦一杯に揺れる蒲公英　芳

平成六年一月二十六日　首尾

於　名古屋住友クラブ

行く秋や

岩垂　景翠　捌

行く秋や酒肴そろへど主亡き　蒲原志げ子

亭々の杉かかる三日月　岩垂景翠

駅の灯へ夜学子急ぎ帰り来て　本田八重子

ポケットベルが又も呼び出す　小原正子

落着(ウ)いて話も出来ぬ喫茶店　道井幸夫

唯々諾々の娘岡惚れ　げ

入婿を狙ふ番頭横恋慕　幸

矢鱈に廻すテレビチャンネル　正

水槽の水母ゆらゆら足延し　げ

新新党の党主決らず　重

名人（ナオ）は操り人形意のごとく　正

高山辺り吟行の旅　げ

デイトにはマクドナルドかモスバーガー　正

重り合へば枯葉かさこそ　幸

月光に凍鶴首を立てしまま　重

異国の丘に監視塔見ゆ　幸

讃（ナウ）美歌の少年少女白き服　重

垣手入れする馴染職人　翠

老木の誇らかになほ花万朶　幸

天守閣趾蝶の飛び交ふ　正

平成六年十一月二日　首尾

於　鎌倉中央公民館

夏めくや

久保田庸子　捌

夏めくやなんぢゃもんぢゃの咲き匂ふ　真田光子

撒水車行く学園の中　東明雅

一碗の濃き珈琲を掌に　橋本京子

句集上梓の友を祝へる　久保田庸子

森（ウ）を出る月はうるみて暈を増す　京

ひと待つらしきやや寒の駅　光

赤い羽根胸元につけワンピース　雅

骨粗鬆症膝が痛いよ　同

猿山の政権交代すんなりと　庸

三日天下の法務大臣　光

オホーツク砕氷船に閉ざされぬ　京

鮟鱇鍋で酌み交す月　光

警官は警官掏摸は掏摸同志　雅

ゴジラが打てばジャイアンツ勝つ　光

ブロンドの女神の髪に憧るる　雅

互ひに余り情が深くて　庸

お葬式公民館で簡単に　光

鶯笛で遊ぶ少年　雅

平安の絵巻さながら花の宴　京

霞める空に夢のいろいろ　庸

平成六年五月八日　首尾

於　光ケ丘近隣センター

滴りの

近藤　守男　捌

滴りの庵に還暦祝ひかな　式田和子

眩しく映ゆる梅の実の青　近藤守男

児がモデル大きな画布を張るならん　浅賀淑代

抱かれし猫は体ねぢらせ　佛淵健悟

烏(ウ)鳴く山辺に月の昇り初め　峯田政志

吉原つなぎ踊浴衣に　登坂かりん

金髪の間夫引きつれて秋渇き　悟

バーゲンの店出ればよろよろ　和

空仰ぎ神学生の呟ける　淑

余震の続く災害の島　政

立看（ナオ）の選挙似顔絵笑みしまま　悟

上からコンと叩く自販機　ん

シリコンを入れて検査の九州場所　和

酒飲み地蔵照らす寒月　淑

物言はぬ女の耳環見つめゐて　和

格安券でにごすハネムーン　ん

移築（ナウ）して子供の国に夢の城　淑

帰り来る父影も朧に　政

花篝ひと休みする奉仕隊　守

おたまじゃくしに聴かすオルガン　悟

平成六年七月四日　首尾

於　高尾　うかい竹亭

初夏や　　権頭　和弥　捌

初夏やにはかに句座を整へし　　権頭和弥
青葉を映す高層の窓　　式田和子
白塗りの遊覧船の行き交ひて　　橘　文子
幼稚園児の小さき靴音　　小野シズ

まろき月バグズバニーも棲みたるか　　浅賀淑代
網のタイツを溢蚊がさす　　佐藤正秋
女房を騙し食らはす鳥兜　　文
とんとん拍子政治家となる　　秋
プラトンのソクラテス像撫づるの図　　代
ＢＧＭの曲はゆるやか　　ズ

盆（ナオ）地住み静かな夜の霙酒　代

鞴祭りの用意ととのふ　和

踏み損ねよろけたふりで抱きついて　同

ホテルのあかり叶ふ正夢　秋

ギヤマンの大壺透かす月五更　文

献体遺言まだ若き人　代

銭（ナウ）湯の気功の会に杖を引く　文

寺の大屋根鳩のあそべる　弥

墨堤の右も左も花万朶　ズ

蒟蒻弁当開くうららか　秋

平成六年五月十四日　起首
平成六年六月十一日　満尾
於　A・C・C

秋　濕

佐藤　良彌　捌

秋濕東郷の杜煙りたる　佐藤良彌
望月の軸淡き墨色　五味蓉子
今年酒記念パーティー華やかに　吉村ゑみこ
英字新聞四つにたたんで　浅賀淑代

退陣をいやいや認む独裁者　丹下博之
街にレゲェのなんと明るく　同
緬羊のやうな脚なりひと目惚れ　蓉
お慕ひ申し候と文　こ
辻行燈火のちらちらと中仙道　代
パスタ料理が売りのペンション　蓉

帽飛ばし居眠りをするアルルカン　代
籠の鸚鵡に声をかけられ　之
難病と診断されし子と生きる　こ
ポーズをつくる王女おすまし　同
すずしげな眉曇らせて月宮殿　之
滝浴びてなほさかる煩悩　蓉

夢いまだ追ひつづけゐる老村長　こ
山焼の跡若芽あちこち　彌
機窓には豊葦原の花の雲　代
腹這ひになりとる鮭五郎　こ

平成六年九月二十四日　首尾
於　原宿水交社

邯鄲や

真田　光子　捌

邯鄲やまなうら熱く佇ちつくす　真田光子

月を待ちゐる山荘の庭　水鳥ますみ

ゆっくりと松焼きの皿運ぶらん　倉本路子

紺の暖簾にはしる一文字　村田冨美

実演(ウ)の工芸展の賑ひて　み

胸のふくらみしるき早乙女　路

ホームステイ夢見心地の初対面　み

バイアスロンにエントリーする　同

打ち寄する波音冴ゆる日本海　美

老いを忘れて交はす燗酒　路

家事(ナオ)怠けせっせと励むボランティア　美

毀誉褒貶の真紀子長官　同

初恋の想ひは永久に秘め続け　み

愉悦の刻は明け易きなり　路

煙立つ菜殻火の月しらじらと　美

鳥獣戯画の高山寺前　み

キュービスム(ナウ)とにもかくにもピカソ好き　路

横顔見せてしゃぼん玉吹く　美

幼らの歌声つつむ花吹雪　路

田畑に里に暮れかかる春　み

平成六年九月十四日　首尾

於　新宿角筈センター

小鳥くる

島村　暁巳　捌

哺乳瓶離さぬ吾子に小鳥くる　島村暁巳

昼月浮かべ揺るる大蓼　倉本路子

赤い羽根つけて旅行に出るならん　真田光子

カウベル鳴らし入るブティック　長崎和代

レプリカのモディリアーニを並べたて　同

思ひ切れない初恋のひと　光

ときめきを押へ受話器へ伸ばす腕　巳

尾鰭つけたるマガジンの記事　路

屋上のビアガーデンの賑やかに　光

暑気中りした往診の医師　和

なかなかに選挙区割りのむつかしく　光
つい下を向く閻王の前　巳
潮騒の響く苫屋に抱き合って　和
溜めし想ひをひと息に吐く　路
万作の狐もだえる三日の月　光
サンタクロース探す煙突　和

買ひ替へし新車ひたすら磨きゐる　同
老の背中に止まる初蝶　路
賑はへる靖国神社花吹雪　光
野立の席に深みゆく春　路

平成六年八月二十日　首尾
於　新宿区赤城社会教育会館

秋寒の

鈴木　茂　捌

秋寒の工事場近き句会かな　松本　碧

蔦紅葉するしもた屋の塀　豊田好敏

月を待つ浜辺に潮の高まりて　東　明雅

缶のピースを深々と吸ふ　青木秀樹

胸(ウ)のうちひそかに告ぐる舞踏会　佐古英子

螺旋階段残す玻璃靴　生田目常義

道化者睡眠薬を常用し　鈴木　茂

蝿蚊ごきぶり蚤も友だち　樹

冷奴冷素麺に冷やし酒　雅

大統領に直訴してやる　敏

一百名神（ナオ）を頼りにルワンダへ　雅

女ごころにちょっとほだされ　子

近松も南北もなし恋の道　樹

炬燵の中で思ひ寝の月　義

明けの空隼ひょうと鳴きわたる　敏

眼きらきら兵馬俑佇つ　碧

辻（ナウ）公園野球の児らのユニホーム　樹

八十八夜雨も楽しく　雅

悠久の時はめぐりて花大樹　茂

お遍路の笠揺れる山陰　敏

平成六年十月二十日　首尾

於　電通築地南寮

冬　菫

武村　利子　捌

いつしかに本卦還りや冬菫　武村利子

春近しとて児等の歌声　細川研三

躙り口正客衣紋ととのへて　山田歌子

暖簾が誇る練り切りの菓子　田辺宏子

望の月仮名もじの文巻戻し　田部みどり

こほろぎ鳴けばなぜか涙が　三

菊枕縫うてくれたる女に会ひ　宏

カットグラスに金色の酒　織田康子

リストラに中年世代揺れに揺れ　歌

単線電車ひとり座席に　康

夏(ナオ)場所は新横綱の誕生を　宏

葭簀囲ひを照らす月影　三

奪ひ取りサハラ砂漠に辿りつき　り

仕掛けられたる恋としりつつ　康

げっげっげっげげげの鬼太郎飄々と　歌

聖堂の鐘青く錆びゐる　り

故(ナウ)郷の母が愛でたる九谷焼　宏

籠いっぱいの蜆掬はん　三

桃雅会揃ひレッツゴー花の宴　吉川嘉次郎左衛門

風船とびし碧空の果　歌

平成六年一月二十六日　首尾

於　名古屋住友クラブ

風光る

田村　満子　捌

峰々の淡き梢や風光る　田村満子

海苔干しをする浜の人々　杉江杉亭

立雛に一刀彫師根つめて　蒲原志げ子

揺り椅子で聞く四重奏曲　松田多恵子

月涼し道造詩集ひもとけば　橘文子

避暑地のテニスペアのお誘ひ　げ

片足を踏み込んでゐる恋の罠　文

変心の殿次は乱心　亭

モザイクの民族紛争治まらず　げ

凍玻璃越しに眺む聖堂　亭

地下鉄(ナオ)を出て鯛焼の列につき　文

こどもをだしに通ふ公園　恵

喉元をガーゼで隠す不倫仲　亭

鬼とも化さん女冷まじ　文

威銃犬の遠吠え繊き月　げ

喰ひ忘れたる鵙の早贄　恵

ゲーム(ナウ)機は余命を長く計算し　文

酒も煙草もお気に召すまま　げ

紅枝垂普賢楊貴妃花の寺　恵

春日傘行く哲学の道　執筆

平成六年三月二日　首尾

於　鎌倉中央公民館

もみづるを

椿　紀子　捌

満天星のもみづるを待つ雨後の庭　橘　文子

月を映せる池のささ波　高橋　豊美

蝗まろ大鉄鍋にいりつけて　横井　凛美子

コンピューターにかけるレシピー　椿　紀子

二次元（ウ）の格闘少女恋をする　豊

新婚旅行宇宙遊泳　凛

この頃は妙に気の合ふ米ロシア　文

汗拭ひして開け放ちたり　凛

冷酒を老師と酌まむ青畳　豊

鳶（とび）山崩れあの尾根の先　同

御陵（ナオ）の石人石馬冬の蝶　紀

四度繙く三国の史書　文

凄艶のホステスしづかに狂ひゆき　紀

汝が指触れし肌は洗はず　文

情夫（いろをとこ）逃がす夜釣の月の舟　凛

高速道路またも渋滞　文

前衛（ナウ）の舞踏テントに暮し慣れ　同

鳥雲に入りレンズ向けたる　豊

※※※西方へぶらり花の座甘露の座　紀

笙ひちりきの楽に春逝く　凛

※ 日本三大崩れの一つ

※※※ 悼　杉江杉亭宗匠

平成六年十月二十二日　首尾

於　代田橋　大原会館

黒きマリア　登坂かりん　捌

鶴岡の黒きマリアや凍てし玻璃　登坂かりん

額づいて聞く遠き凩　今宮水壺

漁り舟手際あざやか舫ふらん　豊田好敏

耀の符牒のとび交ひし市　中村ふみ

ぬくめ酒生れくる子は男やら　敏

精力剤に自然薯を擂る　み

月の唄嬢歌の里と伝へ来て　壺

四駆の車友だちに売り　み

富ちゃんは反対のはず消費税　同

インド・ペスト禍いつか終焉　敏

蛇（ナオ）の衣路地の溝板かたかたと　み

夏狂言の化の厚塗り　敏

くちづけは君の鎖骨や盆の窪　同

夢ん中へと melt into　ん

大根馬ゆっくりと引く月斜め　敏

夜会の主役古稀の老嬢　同

死（ナウ）ぬまでになすべきことの多かりき　み

割ればうれしき草餅の餡　壺

薄茶点てまづ一服の花のやど　み

春山スキー賑やかに列　壺

※出羽・鶴岡市馬場町のカトリック教会天主堂

平成六年十一月二十八日　首尾

於　四宮会

原爆忌

長崎和代　篠原達子　瀧川雅代　山崎一恵

澱みなく大川はゆく原爆忌　長崎和代

しばし目つむり蝉声の中　篠原達子

新刊のデザインブック開きゐて　瀧川雅代

ボンボン入れは銀の蓋物　山崎一恵

長崎　和代　捌

月光（ウ）のひらひら降りぬ公使館　雅

窓の芙蓉は恋の合図で　恵

濁酒ためしに飲めと口うつし　同

のっそり出てゆく太っちょの猫　子

円高の一進一退わしゃ困る　雅

九連宝燈つもりたる夢　子

凍鶴（ナオ）の凛々しく立てり田のほとり　恵

寒行僧の錫杖に月　子

留学のローマ字ふってあいうえお　恵

巴里を想へば熱くなる胸　子

つけ髭で人にかくれて燃えしころ　雅

貫禄ゼロの亭主関白　同

掘抜（ナウ）きの池に真鯉の浮き沈み　子

旧の正月集ふはらから　代

ひともとの花の名木まなかひに　恵

バトントワラー揃ふのどけさ　雅

平成六年八月六日　首尾

於　池袋　瀧沢

糸柳

細川研三　捌

城の影堀に映して糸柳　細川研三

たんぽぽ咲ける土手の語らひ　中村テル

皆集ひカイト凧など作るらん　猪子春治

俄に家のにぎはひにけり　木全光子

短夜の明けてほんのり窓の月　田中美代子

彼と彼女は葛練りと蜜　木股きよ子

手枕に離さないでと頬寄せる　吉川嘉次郎左ェ門

解散風が議事堂を吹く　安藤雅子

ひとときのたばこ一服外は雨　高木節子

空間緑化街に住まへば　鈴木しづ子

スキー下手転げに備へ着ぶくれる　北村契子

車座になり雪見酒酌む　代

肩で泣く年増芸者のいとほしく　治

ぬれてゆらりと惑ふ秋蝶　節

月円かひょっとこ面も踊りの輪　よ

秋茄子三つ人にあげたり　ル

ふるさとに夢のみ残し嫁ぎ来ぬ　雅

品よく座る犬がお座布団に　づ

着飾って稚児の行列花万朶　門

留守居の身にもうららかな空　契

平成六年九月十三日　首尾

於　名古屋住友クラブ

窓に涼しき

本田八重子　捌

開け放つ窓に涼しき桂の木　本田八重子
薄手の鉢に盛りし桜桃　加藤道子
子供らのバンド練習つづきゐて　中川哲
掃除モップを新品に替へ　橋野代代子

公園(ウ)の記念碑照らす夜半の月　杉江杉亭
精霊流し終へて媾曳　哲
秋袷裾にはらりと砂こぼれ　道
ゆるみて届く宅配の品　代
建てかけの住宅並ぶ新開地　亭
サッチャーもどき怪気炎あげ　道

諸(ナオ)粥を肴に三合かるく飲み　哲代

弦月昇る炭焼の窯　哲代

愛ラブとペイント描くサポーター　道

キッスマークを隠す繃帯　亭

土耳古菓子好んで猫の振る尻尾　哲

胡坐の面々水煙草吸ひ　亭

なつ(ナウ)かしき人の出て来る夢の中　重

緑の羽根を衿元にさし　代

老禰宜の声爽やかに花万朶　哲

鮎放流の便り続々　亭

平成六年七月六日　首尾

於　鎌倉中央公民館

ダービーや

松田多恵子　捌

ダービーやターフを取りて駿馬駆け　松田多恵子

開襟シャツも混じる観客　杉江杉亭

こだはりの紅茶豊かに香るらん　橘文子

最上段に天金の辞書　加藤道子

十三夜のこる町並そのままに　同

初の出会ひは芋煮会場　亭

美術展君によく似し画の愛しく　恵

ロシアの大地強く踏みしむ　文

動乱の戦火の中に佇む子　亭

練習曲の初めだけ弾く　文

玻璃(ナオ)戸越し雪吊り高き北の宿　亭

霰酒酌む男衆に月　文

お嬢様演じ続けて胃が痛み　同

チラリチラリと焦らすスリット　道

法悦の姿悩まし茶吉尼天　文

会津八一のひらかなのうた　亭

海沿(ナウ)ひのベンチに憩ひ故郷想ふ　恵

穴を出てくる地虫何虫　文

立ち並ぶ千木鰹木に花吹雪　亭

残りし風車担ぎ行く人　道

平成六年六月一日　首尾

於　鎌倉中央公民館

竹落葉

村田冨美　捌

会釈して過ぎたる道や竹落葉　村田冨美

匂ひも涼し敷石の色　椿紀子

オカリナを吹く音軽やか誰ならん　内田麻子

するする送るファックスの紙　神谷安子

月高し同窓の宴酣に　紀

残る蛍をみつけたる義兄　麻

行かうかなそれとも蔦の戻り橋　丹下博之

若さに嫉妬ひとり酌む酒　麻

政治家の答弁いつかはぐらかし　紀

大使公館犬の遠吠え　安

ロシア人冬帽目深にたづねきて　紀

こけつまろびつ雪投げの月　麻

商売のかけひき今と意を決す　之

するりすべらすブラジャーの紐　紀

言ひ訳をしない男に惚れ直し　麻

磨きあげたる銀の燭台　紀

「ああ無情」学園祭の前評判　美

現代っ子の夢は宇宙へ　同

ヤッホーと呼びかけてみる花の山　之

ハングライダーうららかな空　麻

平成六年七月二十三日　首尾

於　A・C・C教室

真夜のアネモネ

文音

ゆくりなく真夜のアネモネ発光す　八代　嫋

翌なき春とかき抱く胸　橘　文子

遠蛙聞きつつ盃を重ねゐて　五味蓉子

溝川の縁鍬洗ひをり　椿　紀子

天瓜粉子ウ付けてやる昼の月　市野沢　弘子

三社祭の晒きりりと　鈴木　千恵子

広角のレンズ手早くセットして　浅賀　淑代

轆轤の陶土立ち上り出す　嫋

それからが長い蘊蓄ご教訓　文

大風呂敷の党首会談　蓉

冬構(ナオ)今年も雪の多さうな　紀

押し頂きし臘八の粥　淑

ニューハーフブロンドの髪妖艶に　千

秋の扇で隠すくちづけ　弘

むら雲の月に置きたる影遠し　文

道標なるヤクの骨冷ゆ　紀

チョモランマ征服せんと語る夢(ナウ)　淑

古びし辞書の少し重たく　嫋

学舎は風琴響く花の中　千

遠足プラン頬寄せて練る　蓉

平成六年四月九日　起首

平成六年十月九日　満尾

◊半歌仙◊

秋の社

小野シズ

ひっそりと秋の社の松陰像
椎の実拾ふ子等の四、五人

若尾よしえ

兵馬俑眺め終れば月出でて
満員列車次も満員

茂田キヨ子

せせらぎにまぎれる声を確かめつ
鉄板料理釣り立ての鮎

膝送り

受賞者の在庫の本も売り切れる
ワイングラスに残る口紅

え

みそかごと親にも言へぬ仲となり
外国青年習ふ陶芸

ズ

子

ズ

災害の見舞の電話長々と　子

中州で眠る水鳥の月　え

臘八会暁闇ついて走る僧　ズ

おトイレするのもお修行のうち　え

シルバーの割引券は有効に　子

お土産に買ふ京の豆炒　え

記念樹の花に集ひし同期生　ズ

笑ひさざめくうららかな午後　子

平成六年十月二十三日　首尾

於　世田谷　梅丘会館

曼珠沙華

稲葉　道子　捌

同じ駅同じ所に曼珠沙華　稲葉　道子

四十年住みて仰ぐ満月　若尾　よしえ

師の御軸墨痕凛と爽やかに　小野　シズ

幼稚園児の楽しげな歌　川澄　みよ

行商の豆腐屋さんはマイカーで　同

簗にあがりしとりたての鮎　え

大地震度々襲ふ北海道　ズ

我を忘れて彼に近寄る　え

ワンレンの髪さらさらとここちよく　よ

ミルクたっぷり熱きコーヒー　ズ

丸腰で救援隊は出発す　え
氏神様の散松葉踏み　よ
庭石の枯蟷螂に月淡し　ズ
ノーベル賞を祝ふ乾杯　道
親心ピアノに託すひたむきさ　え
窓を開けば舞へる初蝶　ズ
縄文の埴輪の苑の花吹雪　よ
馬も羊も陽炎の中　え

平成六年十月六日　首尾
於　世田谷美術館

土用照

加藤　治子　捌

和やかに一期一会や土用照　加藤治子

ここちよく聴く初蝉の声　武村利子

留学生タンゴに酔ひて帰るらん　近田順子

星を数へる子等のハミング　小嶋裕佳

渋帯の高架の車月まどか　太田孝

無人売り場に並ぶ柿・栗　田中寿美

行く秋を惜しみて交はす吟醸酒　福井直子

波たてる身を黒きドレスに　順

崩れゆくカルメンいだくホセの影　利

吐息のやうに開く待宵草　順

新聞のけふの運勢楽しみに　美
嫁の里から届く寒鰤　治
凍月に光るナイフを野の果てに　順
老いたる人の歩みゆるやか　同
憲法へ白眉の男説まげる　孝
遍路の旅に犬も道づれ　直
ころもてふ連衆つつむ花吹雪　利
池の端にて食べる田楽　執筆

平成六年七月二十六日　首尾
於　豊田産業文化センター

秋時雨

五味　蓉子　捌

灯を低くともして聞けり秋時雨　五味蓉子

浪の上なる襖絵の月　内田麻子

鶺鴒の石の間より飛び立ちて　塚本泰子

シャッターチャンスきめる一瞬　長谷えみ子

誕生会姉妹みたいな母と娘と　今村すま子

焼酎割りがまはり軽くち　瀬木志津

ポロシャツは伊太利製をさり気なく　麻

ミニスカートに声をかけらる　泰

思ふ壺単車の腰にしがみつき　津

夫婦茶碗をぽろりと落す　蓉

消費税牛歩戦術幻に　す

あれは狐火たれの呼ぶ声　麻

山眠る月の御読経観音寺　泰

骨牌占ひ旅のつれづれ　え

ランニングシュートを決めし黄金の脚　す

家庭医学書売れ筋となる　蓉

斎宮の面影偲ぶ京の花　津

桐塑でつくる小さき立雛　え

平成六年十月十三日　首尾

於　梶が谷房連庵

蝉しぐれ

佐々木有子　捌

超高層泛かび上りぬ蝉しぐれ　佐々木有子

サングラス売るとつくにの人　竹田登代子

ワインゼリードラムの音に揺るるらん　山本千代子

鋲で止めたる旅の絵葉書　倉本路子

月光のくまなき庭に降り立ちて　今宮水壺

蓮の実とんでふいと忘れし　登

盲目（ウ）の馬とたはむる秋の蝶　千

シェヘラザードのあつきロマンス　路

抱きあふ男女に砂漠の星が降り　千

あだし男がぬっと現る　壺

よく聞けばハンコ下さい宅急便　登

寒餅をつく湯気のもうもう　路

鯨見る船の出てゆく月の湾　千

神の御加護のあるやあらずや　登

墨象といふ滅茶苦茶を書き散らし　壺

すこし汚せし春の手袋　染谷佳之子

巡回の診療バスの花明り　路

ひとり遊びのしゃぼん玉ふく　千

平成六年六月十六日　首尾

於　新宿角筈地域センター

八入にも

橘　文子　捌

八入（やしほ）にも紅重ね梅匂ふ　橘　文子

土しっとりと啓蟄の苑　副島　久美子

春炬燵硯の池に墨ためて　秋元　正江

子のCDをちょっと拝借　太田　狷之介

駅裏の放置自転車照らす月　浅賀　淑代

前売りの列続くやや寒　高橋　豊美

ロ（ウ）ザリオ祭祈るうなじのすき透り　久

多情多恨は母の血統　江

旅愁とは恋する日々の終りにて　久

三毛作の豊かなる島　代

振り散らす汗のしたたり草野球　介
新型カメラ使ひこなせず　久
冬の月漱石旧居に猫探し　江
雪おろしには足りぬ男手　美
トッピングあれこれ言って頼むピザ　代
百薬の長信じ乾杯　介
廃校の花惜しみつつ山下る　美
巣立ちの雛を見つむ親鳥　代

平成六年三月十二日　首尾
於　A・C・C教室

斉州島

塚本　泰子　捌

斉州島ゴルフの旅や花万朶　塚本泰子
春の嵐に騒ぐ砂浜　内田麻子
能舞台光おぼろに届き居て　長谷えみ子
視野をよぎるは猫か鼠か　五味蓉子
月の帯窓に射し来る高速路　み
友に貰ひし南瓜かさばる　麻

墓参り先客の香煙りつつ　泰
故郷何時かニュータウンなり　蓉
目張り濃く入れし瞳に見つめられ　泰
自分から撒く恋の噂を　麻

それ程に持てぬ男のボディービル　み

柚子湯に沈む小太りの妻　泰

湯気立つる屋台のおでん月の下　蓉

宰相・庶民政治不信に　麻

夏の鴨仲間はづれが一羽ゐる　み

カラオケ嫌ひバーの止り木　蓉

ゆらゆらと柳の糸は髪に触れ　麻

海市のたつと集ふ写真家　み

平成六年四月十一日　首尾

於　国立　五味邸

三世代

町田　順風　捌

三世代和む新居や八重桜　町田順風

里より届く初小夏柑　若尾よしえ

あとさきの鳩と田返しひたすらに　藤井初江

チャイムの前に腹時計鳴る　小野シズ

月明り大桟橋に煌々と　稲葉道子

歌声のせて爽やかな風　え

外人（ウ）も金刀比羅祭参拝す　江

夫婦寝そべり野球観戦　同

ジャンボリー熱く炎えたる幼な恋　ズ

殿はお手あげ政治渋滞　道

輸入米なれれば親し味も良く　え

けふはピラフであすはチャーハン　道

証誠寺月夜の狸に般若湯　ズ

焚火の煙あはくただよふ　順

同級生共に老いの身いたはりつ　江

来られぬ友の安否気づかふ　ズ

花慕ふ径自から草の中　え

川をとび越え蝶はひらひら　道

平成六年四月十七日　首尾

於　梅丘会館

◊短歌行◊

背骨一本

ビール乾す背骨一本通りけり　権頭和弥

梅雨の晴れ間の盛る屋上　佐藤正秋

赤青黄帽子とびとび並びゐて　丹下博之

クォーツ時計の電池入れ替へ　浅賀淑代

奈良井宿自転車を駈る藤村忌　橘文子

鬢のほつれは野葡萄の味　弥秋

月高くマリアッチ聞く影二つ　之代

この齢にして悪の愉しみ　子之

門前の習はぬ小僧に教へられ　弥

磨崖の隷書山の頂

韃靼が関の声あぐ花の下

行く春惜しむ大胡座して

膝送り

厨(ナオ)辺に蜆取る手を興じたり　秋代

かごめかごめの子らの真ん中　代子

幽顕の境さまよふ神の前　子弥

寛永の頃ここに来し象　弥秋

逢引きのポケベルコード二進法　秋之

無言のままに荒ぶりて抱く　之代

指物師家伝細鑿凍てし月　代弥

チュウインガムをほふほふと噛む　弥秋

烏(ナウ)には烏の事情クァと跳び　秋之

堆肥積み上ぐ篤農の家　之子

花守りて列島縦断五十年　子代

蝿の生まれてまだ薄きはね　代

平成六年六月十一日　首尾

於　岩月ビル

あとがき

めでたく『猫蓑作品集V』を出版できますことは、真に嬉しく大きな喜びでございます。明雅主宰の「正しい式目の連句を伝え残そう」との熱い想いに、応えようと努力する会員の作品群は、どっしりとした柱を建てつつあります。従って生まれる作品は厖大な数となりますが、主宰の指示に従い捌一人一巻と相なりました。

校正には主宰のお手を煩しつつ、加えて須田智恵・桑原美津・久保田庸子・梅田利子・長崎和代の諸氏にもお目通し頂きましたこと御礼申し上げます。又、毎号の作品の取り纏めと発送をお引き受け下さいます梅田利子氏に重ねて深謝いたします。

下鉢清子

猫蓑作品集　V

平成七年三月吉日

発行人　東　明雅

発行所　猫　蓑　会

定価　一、八〇〇円（送料実費）

印刷所　株式会社　岩田印刷